

石川県能美郡辰口町

岩内遺跡

1988

石川県立埋蔵文化財センター

石川県能美郡辰口町
岩内遺跡

1988

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、県単道路改良事業（加賀産業道路拡幅工事）に係る岩内遺跡テラダ地区の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施にあたっては、小松土木事務所・辰口町教育委員会・辰口町立博物館の協力を受けた。
3. 本遺跡の遺構実測図・出土遺物・遺物実測図・写真・調査日誌等の記録保存資料は、当センターに一括して保管されており、再活用に便ならしめている。
4. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。（ ）内は現職名である。
藤 則雄（金沢大学教育学部教授）……………第6章第2節
北野博司（石川県立埋蔵文化財センター主事）……第5章第2節
本田秀生（石川県立埋蔵文化財センター嘱託）……第4章第2節
山本直人（石川県立埋蔵文化財センター主事）……第1～3章、第4～6章の第1節
5. 本書は、石川県立埋蔵文化財センター主事山本直人が編集した。

目 次

| | |
|---------------------------|----|
| 第1章 遺跡の位置と環境…………… | 1 |
| 第1節 地理的環境…………… | 1 |
| 第2節 歴史的環境…………… | 2 |
| 第2章 調査の契機と経過…………… | 4 |
| 第1節 調査の契機と分布・試掘調査…………… | 4 |
| 第2節 発掘調査の概要と経過…………… | 4 |
| 第3章 層 序…………… | 8 |
| 第4章 遺 構…………… | 10 |
| 第1節 土坑・溝・ピット…………… | 10 |
| 第2節 竪穴状遺構…………… | 10 |
| 第5章 遺 物…………… | 41 |
| 第1節 縄文時代の遺物…………… | 41 |
| 第2節 平安時代～中世の遺物…………… | 45 |
| 第6章 岩内遺跡テラダ地区をめぐる諸問題…………… | 49 |
| 第1節 岩内遺跡テラダ地区をめぐる…………… | 49 |
| 第2節 岩内遺跡出土石器の石質について…………… | 49 |
| 引用文献…………… | 50 |

図版目次

- 図版1 岩内遺跡付近航空写真
図版2 岩内遺跡テラダ地区航空写真1
図版3 岩内遺跡テラダ地区航空写真2
図版4 岩内遺跡テラダ地区航空写真3
図版5 岩内遺跡テラダ地区航空写真4
図版6 岩内遺跡テラダ地区航空写真5
図版7 岩内遺跡テラダ地区航空写真6
図版8 上. 岩内遺跡付近航空写真2 (東より)
下. 岩内遺跡テラダ地区航空写真7 (北より)
図版9 上. 岩内遺跡テラダ地区航空写真8 (西より)
下. 岩内遺跡テラダ地区航空写真9 (南西より)
図版10 岩内遺跡テラダ地区遠景 上. (苜生遺跡より)
下. (北より)
図版11 上. 発掘調査作業風景
下. 12~20区 (西より)
図版12 竪穴状遺構 上. (南より)
下. (東より)
図版13 ピット482内須恵器出土状態
図版14 上. 13区北壁
下. 39区北壁
図版15 上. 36区北壁
下. 44区北壁
図版16 縄文時代の遺物
図版17 墨書土器等
図版18 下. 竪穴状遺構出土遺物
下. 平安時代の遺物

付表目次

- 第1表 岩内遺跡と周辺の遺跡一覧表……………2
第2表 打製土掘具一覧表……………44
第3表 遺構・包含層出土遺物観察表……………48
第4表 岩内遺跡(テラダ地区)出土打製土掘具の石質……………49

挿 図 目 次

| | | |
|------|---------------|----|
| 第1図 | 岩内遺跡の位置図 | 1 |
| 第2図 | 岩内遺跡と周辺の遺跡分布図 | 3 |
| 第3図 | 岩内遺跡と発掘調査範囲図 | 6 |
| 第4図 | 調査グリッド設定図 | 7 |
| 第5図 | 層序断面実測図 | 9 |
| 第6図 | 竪穴状遺構実測図 | 12 |
| 第7図 | 竪穴状遺構出土遺物実測図 | 13 |
| 第8図 | 遺構平面図1 | 14 |
| 第9図 | 遺構平面図2 | 15 |
| 第10図 | 遺構平面図3 | 16 |
| 第11図 | 遺構平面図4 | 17 |
| 第12図 | 遺構平面図5 | 18 |
| 第13図 | 遺構平面図6 | 19 |
| 第14図 | 遺構平面図7 | 20 |
| 第15図 | 遺構平面図8 | 21 |
| 第16図 | 遺構平面図9 | 22 |
| 第17図 | 遺構平面図10 | 23 |
| 第18図 | 遺構平面図11 | 24 |
| 第19図 | 遺構平面図12 | 25 |
| 第20図 | 遺構平面図13 | 26 |
| 第21図 | 遺構平面図14 | 27 |
| 第22図 | 遺構平面図15 | 28 |
| 第23図 | 遺構平面図16 | 29 |
| 第24図 | 遺構平面図17 | 30 |
| 第25図 | 遺構平面図18 | 31 |
| 第26図 | 遺構平面図19 | 32 |
| 第27図 | 遺構平面図20 | 33 |
| 第28図 | 遺構平面図21 | 34 |
| 第29図 | 遺構平面図22 | 35 |
| 第30図 | 遺構平面図23 | 36 |
| 第31図 | 遺構平面図24 | 37 |
| 第32図 | 遺構平面図25 | 38 |
| 第33図 | 遺構全体図 | 39 |
| 第34図 | 縄文時代の遺物出土状況図 | 42 |
| 第35図 | 縄文土器拓影 | 43 |
| 第36図 | 石器実測図 | 44 |
| 第37図 | 遺構・包含層出土遺物 | 46 |
| 第38図 | 包含層出土遺物 | 47 |

第1章 遺跡の位置と環境

(第1表, 第1・2図, 図版1・8上)

第1節 地理的環境 (第1図, 図版1・8上)

辰口町^{たつのくち}は石川県加賀地方の中央部に位置し、その北縁と東縁は県下最大の河川である手取川に面している。町域は手取川に沿って東西約10km、南北約7.5kmにおよび、地形は手取川扇状地・能美丘陵・能美山地の3者に大きく分けられる。能美丘陵は海成段丘から成立しており、高位海成(?)段丘と低位海成段丘の「地形面とも堆積面を残しているのは一部の所で、他の大部分は、中新統と更新統を浸食してできた浸食性段丘面である」という(藤1985)。

岩内遺跡^{いわうち}は、能美郡辰口町火釜・岩内^{のみ たつのくち りがほ いわうち あぞう}・筋生地内に所在する。この地区は辰口町の北端中央部に位置し、北に手取川を臨み、南側の背後には能美丘陵をひかえている。また、本地区は手取川扇状地南側の扇側部に立地し、扇状地上にありながらも扇側部に位置するため比較的安定した地域となっていたことが推測される。本遺跡は扇側部の島状地帯上に立地しており、本遺跡の西約4kmに所在する上開発遺跡^{かみかほつ}・下開発遺跡^{しもかほつ}・徳久荒屋遺跡^{とくひさあや}(北野1985)と同じ立地条件である。この付近の海拔高度は43~50mであり、丘陵上は約80mとなっており、その比高差は30m以上を測る。丘陵に登ると加賀平野北部から日本海にかけて一望のもとに見渡すことができる。

周辺の丘陵地では植林されて杉林となっている箇所も見られるが、この地域の現存植生では杉林以外はアカマツ林やコナラ林の雑木林となっている。この地域の原植生は、標高350mまでは常緑広葉樹の優占する照葉樹林帯で、350mをこえる一部が落葉広葉樹林帯であったと考えられている(里見1983)。実際に雑木林の中を歩いてみると、コナラがいたる所にみられ、沢ぞいにはトチノキが点在しており、稀にクリがみられるといった状況である。トチノキは胸高10cm前後であり、実のなるほどのものではない。

丘陵地の山林中に清水^{しょうすい}と呼ばれる自然湧水点があり、遺跡周辺では館の坂の清水(第1図A)、^{たな さか しょうすい}気の清水(同図B)、^{け しょうすい}六ヶ清水(同図C)が存在する。遺跡からの直線距離はそれぞれ400m、750m、1500mである。

なお、辰口岩内在住の山内千之さんの御教示によれば、岩内遺跡付近での近年の最大積雪量はおよそ70cmであるという。



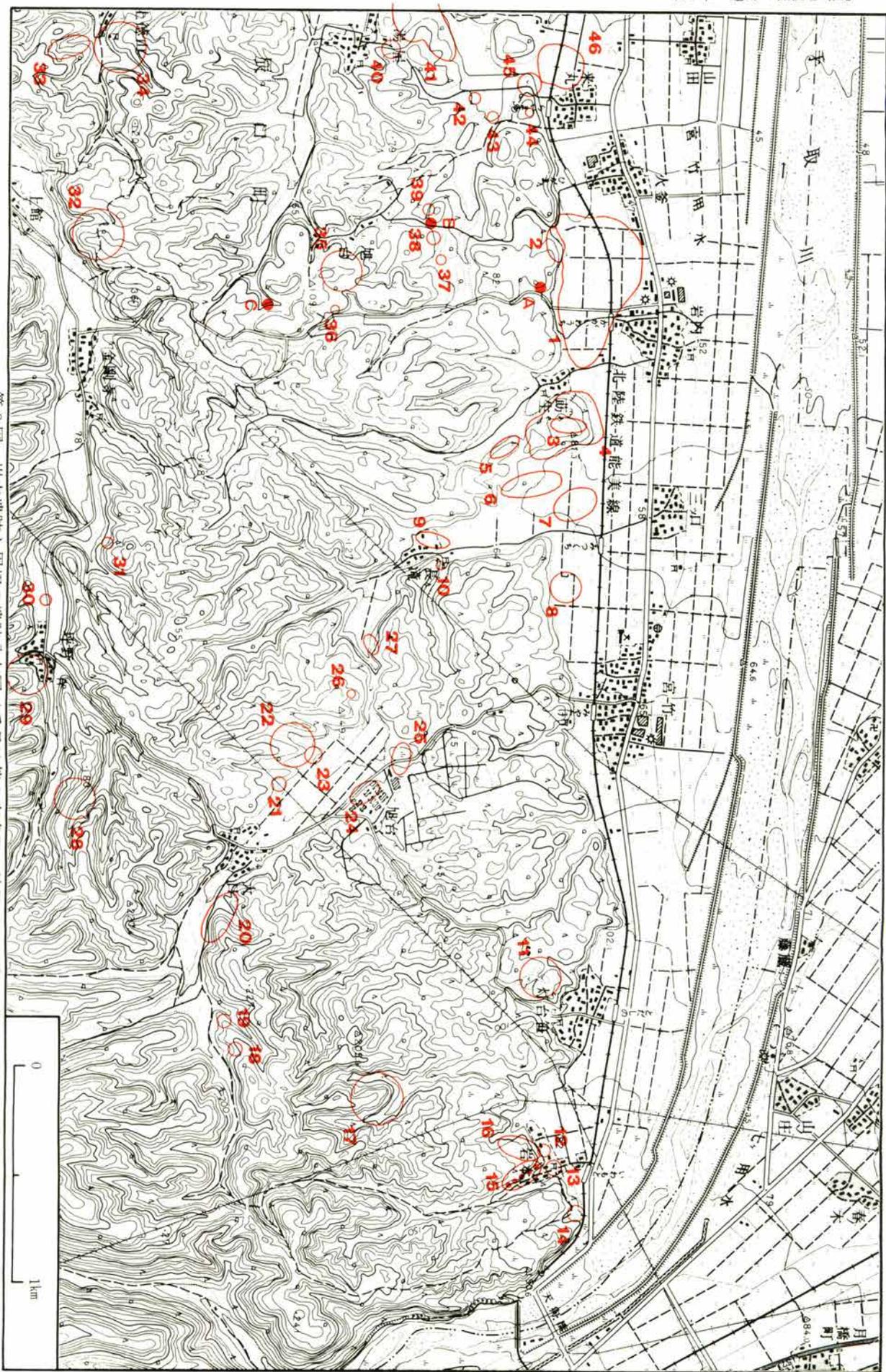
第1図 岩内遺跡(●印)の位置図

第2節 歴史的環境(第1表, 第2図)

岩内遺跡と周辺の遺跡について、まとめたものが第1表である。この表の作製にあたっては『石川県遺跡地図』をもとにした(石川県立埋蔵文化財センター1986)。

第1表 岩内遺跡と周辺の遺跡一覧表

| 番号 | 県番号 | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 現況 | 時代 | 出土遺物 |
|----|--------|-----------|----------|-----|---------------|---------------|----------------------|
| 1 | 6127 | 岩内遺跡 | 辰口町岩内・苜生 | 集落跡 | 水田 | 縄文, 古墳~中世 | 縄文土器, 石器, 土師器, 須恵器 |
| 2 | 1001 | 岩内茶仙堂遺跡 | 辰口町岩内 | 包含地 | 丘陵裾, 山林 | 中世 | 珠洲, 加賀, 五輪塔 |
| 3 | 997~98 | 苜生遺跡 | 辰口町苜生 | 集落跡 | 台地, 山林, 畑地 | 縄文 | 縄文土器, 石器 |
| 4 | 996 | 苜生城跡 | 辰口町苜生 | 城跡 | 台地, 山林, 畑地 | 中世 | |
| 5 | 6129 | 苜生城山奥遺跡 | 辰口町苜生 | 窯跡 | 丘陵斜面 | 奈良 | |
| 6 | 6130 | 苜生B遺跡 | 辰口町長滝 | 包含地 | 山林 | 古墳~平安 | 土師器 |
| 7 | 995 | 長滝遺跡 | 辰口町長滝 | 包含地 | 平地, 水田 | 縄文, 平安 | 縄文土器, 石器 |
| 8 | 6131 | 宮竹遺跡 | 辰口町宮竹 | 包含地 | 平地, 水田 | 縄文, 古墳, 平安~中世 | |
| 9 | 994 | 長滝宗誓寺跡 | 辰口町長滝 | 寺院跡 | 平地, 寺地, 宅地 | 不詳 | |
| 10 | 993 | 長滝経塚 | 辰口町長滝 | 経塚 | 丘陵裾, 山林 | 中世 | 和鏡7, 珠洲, 加賀 |
| 11 | 990~91 | 灯台笹遺跡 | 辰口町灯台笹 | 包含地 | 丘陵上, 畑地 | 旧石器 | 石器 |
| 12 | 983 | 岩本家清館跡 | 辰口町岩本 | 館跡 | | 不詳 | |
| 13 | 981 | 岩本岩根宮遺跡 | 辰口町岩本 | 包含地 | 平地, 杜地 | 縄文 | 縄文土器, 石器 |
| 14 | 6140 | 岩本B遺跡 | 辰口町岩本 | 包含地 | 丘陵裾 | 平安 | |
| 15 | 984 | 岩本1~6号経塚 | 辰口町岩本 | 経塚 | 丘陵斜面, 山林 | 中世 | |
| 16 | 982 | 岩本中世墓遺跡 | 辰口町岩本 | 墳墓 | 台地上, 山林 | 中世 | 五輪塔, 宝篋印塔 |
| 17 | 980 | 岩本白烏尼神社跡 | 辰口町岩本 | 社跡 | 丘陵上, 山林 | 不詳 | |
| 18 | 6139 | 大口A遺跡 | 辰口町大口 | 包含地 | 丘陵斜面 | 奈良~平安 | |
| 19 | 6138 | 大口B遺跡 | 辰口町大口 | 包含地 | 平地, 水田 | 平安 | |
| 20 | 6137 | 大口中世墓 | 辰口町大口 | 墓地 | 丘陵裾 | 中世 | 五輪塔 |
| 21 | 6135 | 大口E遺跡 | 辰口町大口 | 包含地 | 畑地 | 縄文 | |
| 22 | 992 | 大口長生寺跡 | 辰口町大口 | 寺院跡 | 丘陵斜面, 山林 | | |
| 23 | 6133 | 大口C遺跡 | 辰口町大口 | 包含地 | 丘陵裾 | 縄文 | |
| 24 | 6136 | 大口D遺跡 | 辰口町大口 | 包含地 | 水田 | | |
| 25 | 6134 | 大口1・2号窯跡 | 辰口町大口 | 窯跡 | 丘陵裾, 水田 | 平安 | |
| 26 | 6132 | 大口経塚 | 辰口町長滝 | 経塚 | 丘陵上, 山林 | 中世 | |
| 27 | 6696 | 長滝A遺跡 | 辰口町長滝 | 包含地 | 平地, 水田 | | 土師器, 須恵器 |
| 28 | 957 | 坪野智永寺跡 | 辰口町坪野 | 寺院跡 | 丘陵斜面, 山林 | | |
| 29 | 956 | 坪野妙観寺跡 | 辰口町坪野 | 寺院跡 | 丘陵裾, 山林斜面, 水田 | | 石臼 |
| 30 | 958 | 坪野遺跡 | 辰口町坪野 | 包含地 | 丘陵裾, 水田 | 縄文 | 磨製石斧 |
| 31 | 959 | 金剛寺乱の穴横穴 | 辰口町金剛寺 | 古墳 | 丘陵裾, 山林 | 古墳 | |
| 32 | 960 | 金剛寺跡 | 辰口町金剛寺 | 寺院跡 | 丘陵斜面, 山林 | | |
| 33 | 961 | 金剛寺中世墓遺跡 | 辰口町金剛寺 | 墳墓 | 丘陵斜面, 山林 | 中世 | 五輪塔, 宝篋印塔, 古瀬戸壺, 珠洲鉢 |
| 34 | 962 | 徳山寺跡 | 辰口町徳山 | 寺院跡 | 丘陵麓, 山林, 水田 | | 五輪塔, 仏像 |
| 35 | 999 | 旭台A遺跡 | 辰口町旭台 | 包含地 | 丘陵斜面, 山林 | 縄文 | 縄文土器 |
| 36 | 1000 | 旭台B遺跡 | 辰口町旭台 | 包含地 | 丘陵裾, 山林 | 平安 | 須恵器 |
| 37 | 6126 | 火釜C遺跡 | 辰口町火釜 | 包含地 | 丘陵斜面 | 平安 | 須恵器, 土師器 |
| 38 | 6125 | 火釜B遺跡 | 辰口町火釜 | 包含地 | 丘陵斜面 | 平安 | |
| 39 | 6124 | 火釜A遺跡 | 辰口町火釜 | 包含地 | 丘陵斜面 | 縄文 | |
| 40 | 6122 | 湯屋遺跡 | 辰口町湯屋 | 包含地 | 平地, 水田 | 古墳, 奈良~平安 | |
| 41 | 6121 | 湯屋1~4号窯跡 | 辰口町湯屋 | 窯跡 | 丘陵斜面, 谷あい | 奈良 | |
| 42 | 1003 | 来丸さくらまち窯跡 | 辰口町来丸 | 窯跡 | 丘陵裾, 山林 | 奈良~平安 | 須恵器 |
| 43 | 1004 | 来丸丸山遺跡 | 辰口町来丸 | 包含地 | 平地, 水田 | | 須恵器 |
| 44 | 1005 | 来丸古墳 | 辰口町来丸 | 古墳 | 丘陵上, 山林 | 古墳 | |
| 45 | 1006 | 来丸天明寺跡 | 辰口町来丸 | 寺院跡 | 丘陵裾, 山林, 水田 | | |
| 46 | 6123 | 来丸遺跡 | 辰口町来丸 | 包含地 | 平地, 水田 | 縄文, 平安 | |



第2図 岩内遺跡と周辺の遺跡分布図(番号は第1表参照 縮尺1/25000)

第2章 調査の契機と経過

(第3・4図, 図版1・2)

第1節 調査の契機と分布・試掘調査 (図版1・2)

金沢と小松を結ぶ加賀産業道路は、昭和48(1973)年頃から建設され始めたものの、これに伴った発掘調査はおろか分布・試掘調査すらほとんど行われなかったという状況である。弥生時代前期末葉柴山出村式的良好な資料が出土した鶴来町上林遺跡は、この道路建設関連の唯一の緊急発掘調査である。また、石川県内ではここ数年来、この加賀産業道路ぞいに先端技術産業の企業誘致が進み、鶴来町・川北町・辰口町の3町にそれぞれ企業が進出してきている。本遺跡の緊急調査も、辰口町岩内地内の能美丘陵上に広大な用地を造成して建設された先端技術産業の工場周辺の道路整備に伴うものである。

昭和60(1985)年4月、石川県小松土木事務所より、辰口町岩内・筋生地内の加賀産業道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財分布調査依頼があった。これを受けて県立埋文センターは、同年4月30日・5月1日の2日間にわたって分布・試掘調査を実施した。その結果、調査対象区域北東部で遺物包含層が確認され、その遺存状態は比較的良好であった。しかし道路拡幅部東側の地下に送水管が埋設されており、その工事幅は4～5mに及んでおり、この部分ではすでに埋蔵文化財が破壊されてしまっていることが判明した。それで、まだ遺構・遺物包含層が残存している1000㎡については発掘調査が必要である旨、直ちに道路建設課へ回答した。協議の結果、発掘調査は5月中旬から開始することに決定した。

第2節 発掘調査の概要 (第3・4図)

1. 発掘調査の概要

調査対象区域北東部において遺跡の広がりとして認められた2000㎡のうち、送水管埋設によって埋蔵文化財が破壊されてしまった部分を除き、1000㎡を対象に調査した(第3図)。ただし、農道や水路などの個所は調査時点でも農作業等で使用されていたため、その部分は残したまま調査を進めた。それで、実質調査面積は880㎡である。

調査グリッドに関しては、調査区全体に4m×4mメッシュのグリッドを設置した(第4図)。南北方向では南から北に向って1～46区を設け、東西方向では東から順にA～R区を設けた。

2. 調査の経過

- 5月17日 調査を開始する。仮設事務所を建設したあと、18日に器材を搬入する。
- 5月21～22日 重機による表土はぎを行う。
- 5月24・27日 杭打ち作業を行い、調査グリッドを設定する。
- 5月23日 遺物包含層の掘り下げ・遺構検出・遺構の掘り下げの作業工程を、南から順に進めていき、暫時～6月29日 写真撮影・実測を行う。
- 6月1～13日 竖穴1～3を掘り進めながら、並行して実測・写真撮影を行う。
- 6月25日 当初予想していたよりも遺構密度ははるかに高く、実測にかなりの日数がかかることが予測され、職員1名では実測することはとうてい不可能である。それで航空測量を実施することになり、小

松土木事務所でその打ち合せを行う。

7月1～15日 調査を休止する。

7月16～18日 層序断面を実測する。

7月24～26日 調査区内を清掃し、26日に航空測量を行う。

8月1～3日 第5b層の掘り下げ・花粉分析資料の採集・発掘器材の整理・層序断面実測と土層説明などの作業を行い、3日に現地調査をすべて終了する。

3. 遺物整理作業

本遺跡から出土した遺物の整理作業は、昭和62年度に石川県埋蔵文化財整理協会に委託して実施した。委託内容は、遺物の記名・接合・復元・実測・トレースである。担当者は、浅野豊子・小林直子・新谷由子の3名である。

4. 調査関係者

試掘調査 福島正実・山本直人（石川県立埋蔵文化財センター主事）

本田秀生・山本泰幹（石川県立埋蔵文化財センター調査員）

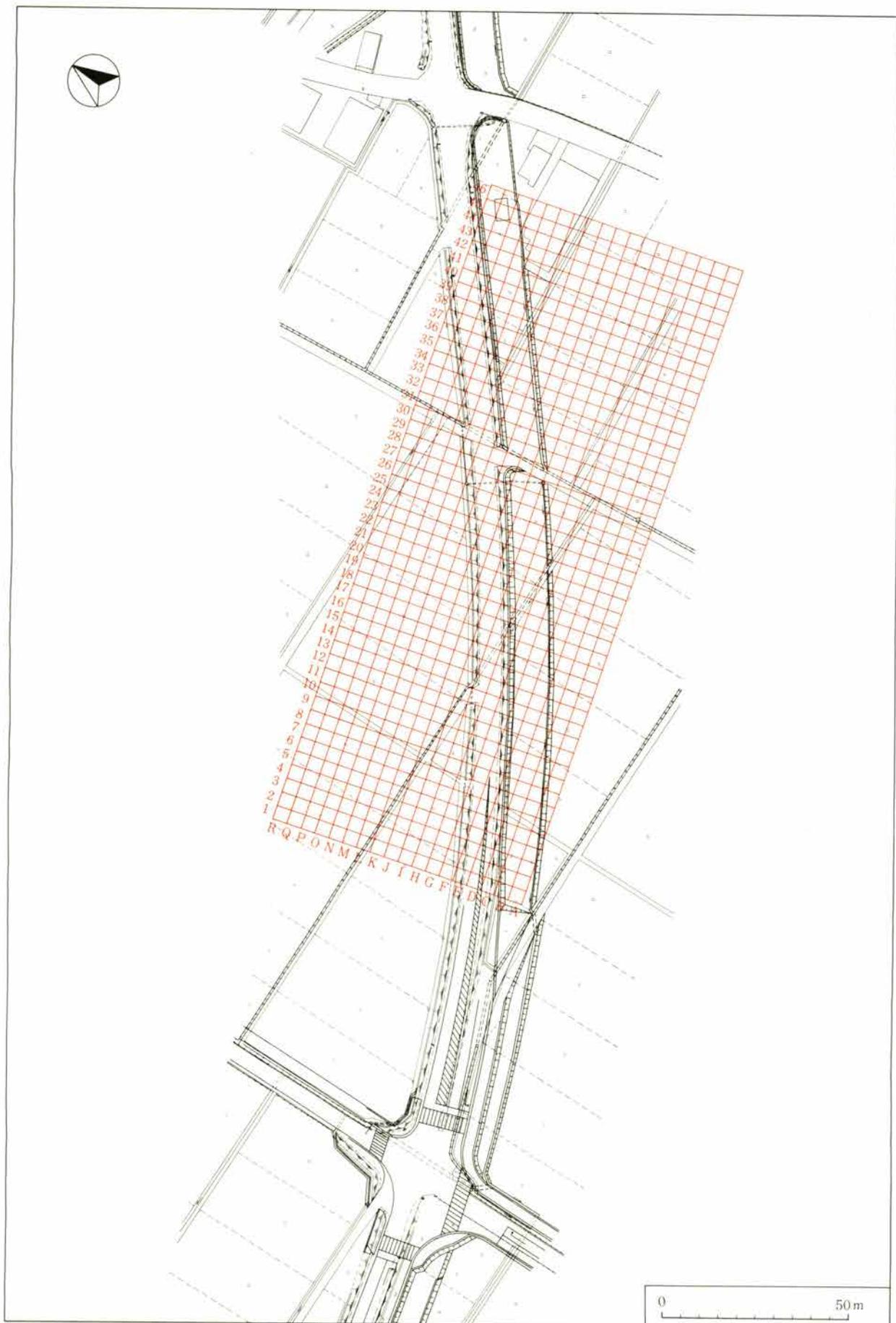
発掘調査 山本直人（同センター主事）

宮下栄仁・本田秀生・新城えり子・本 由美子（同センター調査員）

川口盛一・川向義政・神田千栄子・中田健次・能沢咲子・伴場いと・道下幸助・森田一政・山内勝孝
・山内隆子・山口智栄子・山内長松（岩内）

奥田外雄・北出政雄・白山久義・富田文正・西田繁光・橋 友作・橋爪英信・藤田 忠・米田与作
（火釜）

越野重治・斎藤宏文・仲島 稔（金沢大学学生）



第4図 調査グリッド設定図 (縮尺 1/1500)

第3章 層 序

(第5図, 図版14・15)

本遺跡の層序は、基本的に現耕作土(第1層)、盛土(第2層)、旧耕作土(第3層)、遺物包含層(第4・5層)に4大別できる。

層序の細別は、次のとおりである。

第1層(現耕作土層) 暗褐色粘質土層

第2層(盛土) 小さな円礫を含む黄褐色砂礫層

第3層(旧耕作土)

第3a層 灰褐色粘質土層

第3b層 黄灰褐色粘質土層

第3c層 鉄分堆積層

第3d層 濁灰褐色粘質土層

第3e層 暗灰色粘質土層

第4層(遺物包含層)

第4a層 黒褐色土層

第4b層 黒色土層

第4c層 褐色砂質土をブロック状に含む黒色土層

第4d層 黒灰色土層

第4e層 黒灰褐色土層

第4f層 暗灰褐色粘質土層

第4g層 黒褐色粘質土層

第4h層 褐色砂質土をブロック状に含む黒褐色粘質土層

第4i層 黒灰色粘質土層

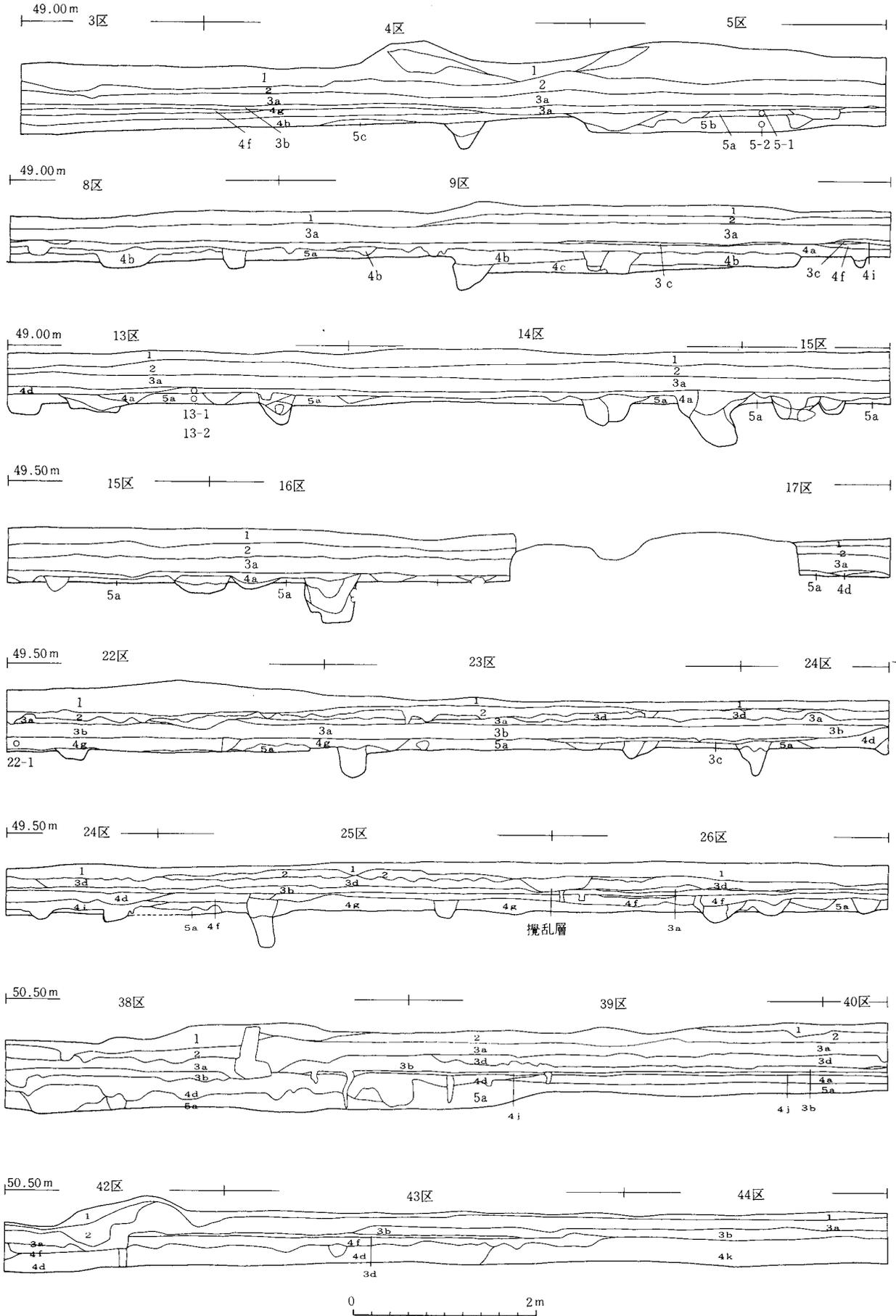
第5層(遺物包含層)

第5a層 暗褐色砂質土層

第5b層 黒色土・黒褐色土がやや混って色調がやや濁っている褐色砂質土層

第5c層 灰褐色砂質土層

また、第4・5層の遺物包含層からの土器等の出土量は、全体的に少ない。



第5図 層序断面実測図 (縮尺 1/60)

第4章 遺構

(第6～33図, 図版2～13・18上)

第1節 土坑・溝・ピット (第6～31図, 図版2～13)

本地区では、土坑は5基、溝は62条、ピットは500基それぞれ確認された。これらのうち、土器等の遺物が出土した遺構については、第6～30図のなかに遺構名で表してある。一般に遺構内からの土器の出土量は少なく、微細な土器片ばかりという傾向が認められ、時代・時期決定はなかなか困難であるが、遺構の大半は平安時代のものであり、ピット101のように縄文時代に属するものもごくわずかであるが存在する。こうした全般的状況のなか、墨書土器がピット164(第37図7)・ピット166(第37図1)・第1号土坑(第37図2)から検出されており、ピット166から確認された須恵器杯(第37図1)は、柱穴の柱痕部分上部から出土している。また、ピット482の底面中央部(柱痕部分最下位)から完形の須恵器皿が埋置された状態で検出された(第37図3, 図版13)。

第2節 竪穴状遺構 (第32・33図, 図版12・18上)

1. 第3号竪穴状遺構 (第32図上, 第33図1～5)

第3号竪穴状遺構は、C・D-9・10グリッドに位置する。北西部は調査区外にあり、南東部は第1、第2号竪穴状遺構によって破壊され、また、大形の柱穴が上面から掘り込まれているため全体の約 $\frac{2}{3}$ を検出したにとどまる。長辺約6.6m、短辺約4.2mの隅円長方形を程するものと考えられる。壁はゆるやかに立ちあがり約20cm残存している。壁溝は検出されていない。床面は平坦で黄褐色粘質土を基調とした土を貼り付けた部分があるが、中央より西側では床面に礫を含むようになる。北東コーナーで覆土掘り下げ時から、焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む部分の確認されカマドかと思われたが、床面では浅い皿状の凹みが検出されたのみで、カマドの様なしっかりとした構築物は検出されなかった。南西コーナーでは、長辺約1.5m、短辺約0.8m、深さ約0.2mの長方形を程する土坑が検出されている。柱穴は、後に掘り込まれたものを除いて深さのしっかりとしたものはない。

覆土は1層黒褐色砂質土、5層黄褐色砂質土を基本とし、部分的に4層暗褐色砂質土を間に狭むという状況を示す。中央より西側では地山に礫を含むためか、5層と地山の判別がしづらくやや掘りすぎってしまった感がある。本来の床面は礫の上面であった可能性がある。

遺物の出土量は少ない。第33図1は須恵器無台坏で全体の $\frac{1}{2}$ を欠く。口径9.8cm、底径5.4cm、器高2.9cmを計る。底部から皿状に立ちあがり、体部の中央よりやや下でくの字に内屈し、口縁部はやや外反する。底部内面には凹凸がみられ、底部外面はへら切りをナデ調整している。胎土は2mm弱の砂粒を極く少量含む程度で良く焼成も良い。内外面とも青灰色を呈する。覆土の上位より出土している。第33図2は土師器高坏で坏部の約 $\frac{1}{4}$ が残存している。外面は輪積痕を残し淡茶灰色を呈するが、内面は良く磨かれており茶褐色を呈する。胎土は1mm以下の砂粒を含む程度で良く、焼成も良い。第33図3は土師器甕である。口縁部の約 $\frac{1}{4}$ と胴部の約 $\frac{1}{4}$ が出土したにすぎず、また、口縁部と胴部は接合せず図上での復元である。口径17.5cm、胴部最大径20cmを計る。口縁部はゆるく外反し、胴部は中位あたりに最大径を持つ。体部調整は内面が横方向のナデ後ケズリ上げ、外面は縦方向のハケである。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、部分的に5mm前後のものも含まれる。焼成は良いが2次焼成をうけぼろぼろになった部分がある。2次焼成は胴部中位以上が強く受けており、そのためか口縁部は残存部分がわずかしかない。第33図4・5は土師器塼と考えられる。両者とも口縁端部をナデ調整し、それ以下を外面は

縦方向の荒いハケ、内面は横方向の荒いハケとしている。

2. 第1・2号竪穴状遺構（第32図下、第33図6～11）

第1・2号竪穴状遺構は、C-9・10グリッドに位置する。両者とも南側に走る送水管のためその約 $\frac{1}{2}$ を破壊され、また、耕作により上面を削られている。現存するプランから直径約1.5mの円形を呈するものと考えられる。両者とも第3号竪穴状遺構、大形の柱穴を掘り込んで構築されており、また、第1号竪穴状遺構は第2号竪穴状遺構を破壊して造られている。覆土は第1号竪穴状遺構が8層暗灰色砂質土、9層黒灰色砂質土とともに焼土ブロック、炭化物を含んでいる。第2号竪穴状遺構は7層黒灰褐色砂質土で9層に類似するものの、焼土ブロック、炭化物をあまり含んでいない。両者とも床面が平坦で壁がゆるく立ちあがる皿状を呈し、その深さは第1号竪穴状遺構が約20cm、第2号竪穴状遺構が約10cmを計る。第1号竪穴状遺構の床面壁ぎわに、1辺約15cm、深さ約10cmの方形の柱穴が3個等間隔に掘られている。

出土物は少ない。第33図6～10は第1号竪穴状遺構、第33図11は第2号竪穴状遺構出土である。6～9・11は土師質小皿である。6は口径7.5cm、器高1.3cm、7は口径8.6cm、器高1.5cm、8は口径9cm、器高1cm、9は他よりやや大ぶりで口径11.7cm、器高2.4cm、11は口径1.4cm、器高1.3cmを計る。器厚はすべてほぼ5mm前後であり、体部外面の調整もすべて一回のナデとしている。器形は、6が体部の立ちあがりやや急角度、7、8はややゆるく、9、11はその中間で、9、11が大小の差はあれ形態的に類似するものの、それぞれ異なった形態を持つ。いずれも底面に指頭圧痕が見られる。胎土はいずれも良く、色調は7、9が部分的に褐色部を持つ淡灰色、6は明るい淡灰色、8は橙色、11は暗い淡灰色を呈す。個体すべて $\frac{1}{4}$ 以下の残存である。

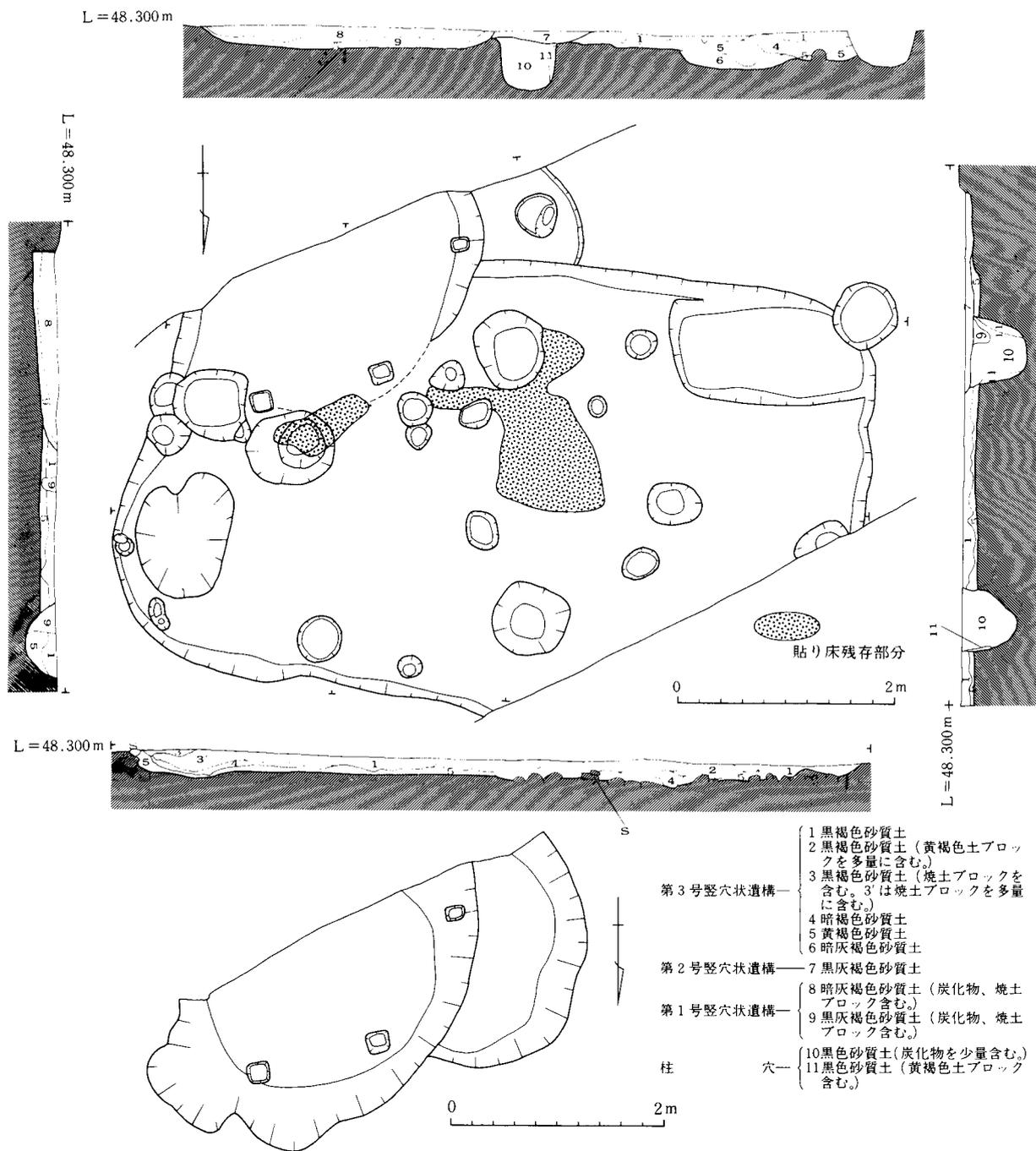
10は土師質埴である。口径28cm、胴部最大径25.5cmを計り、個体の残存は $\frac{1}{6}$ 以下である。口縁はわずかに内湾ぎみに立ちあがる。口縁端部に面を持ち、口縁端部内面がわずかにとびだす。調整は体部内外面ともに横方向を基調としたあらいハケとしている。胎土は2mm前後の砂粒を含むが良く焼成も良い。ススの付着が体部上半に見られる。

3. 小 結

これらの遺構は、遺構検出時に竪穴住居址の切り合いという予想のもとに「竪穴」として取りあつかったため、今回の報告では竪穴状遺構として報告したが、第1・2号竪穴状遺構は土坑とすべきかもしれない。しかし、第1号竪穴状遺構は床面に柱穴を持つことから上屋構造を持つ可能性がある。また、第1・2号竪穴状遺構と分けて考えたが、上面が削られているため、上下関係を持つ土層の差を遺構差としてとらえてしまっている可能性があり、それは、9層と7層が土質的に類似している点からもうかがえる。同様な例は時期が異なるものの小松市佐々木ノテウラ遺跡（北野他1986）にあり、ここでは土坑として取りあつかわれているが、底面の高底差をもついくつかの土坑群を一連のものとし、住居に付随する炊事場としての機能を想定している。これらの点より、通常の土坑と区別する意味で竪穴状遺構としておきたい。

第3号竪穴状遺構はその形態から考えれば竪穴住居址とすべきものかもしれない。しかし、支柱穴、壁溝を持たず、壁の立ちあがりも通常の竪穴住居址とは異なるものである。第3号竪穴状遺構は第33図1の須恵器から7世紀後半ぐらいの位置付けができそうであるが、同期の竪穴住居址の検出例は極めて少なく、その様相ははっきりしない。七尾市万行赤岩山遺跡（土肥他1983）では同期の竪穴住居址が1棟検出されているが、全体の $\frac{1}{2}$ 程度の検出であり、また、遺構の重複が激しく形態ははっきりしない。壁溝、支柱穴、炉址が検出されている。羽咋市柳田シャコデ遺跡でも同期と考えられる竪穴住居址が1棟検出されているが、これも全体の $\frac{1}{2}$ 以下の検出であり形態が方形となるのか長方形となるのかわからない。壁溝、支柱穴が検出されている。また、両遺跡では同期と考えられる掘立柱建物群が検出されているが、本遺跡では調査区が限定されているせいもあろうが、同期と考

第2節 竖穴状遺構



第6図 竖穴状遺構実測図(上 第3号竖穴状遺構 下 第1・2号竖穴状遺構 縮尺 1/60)

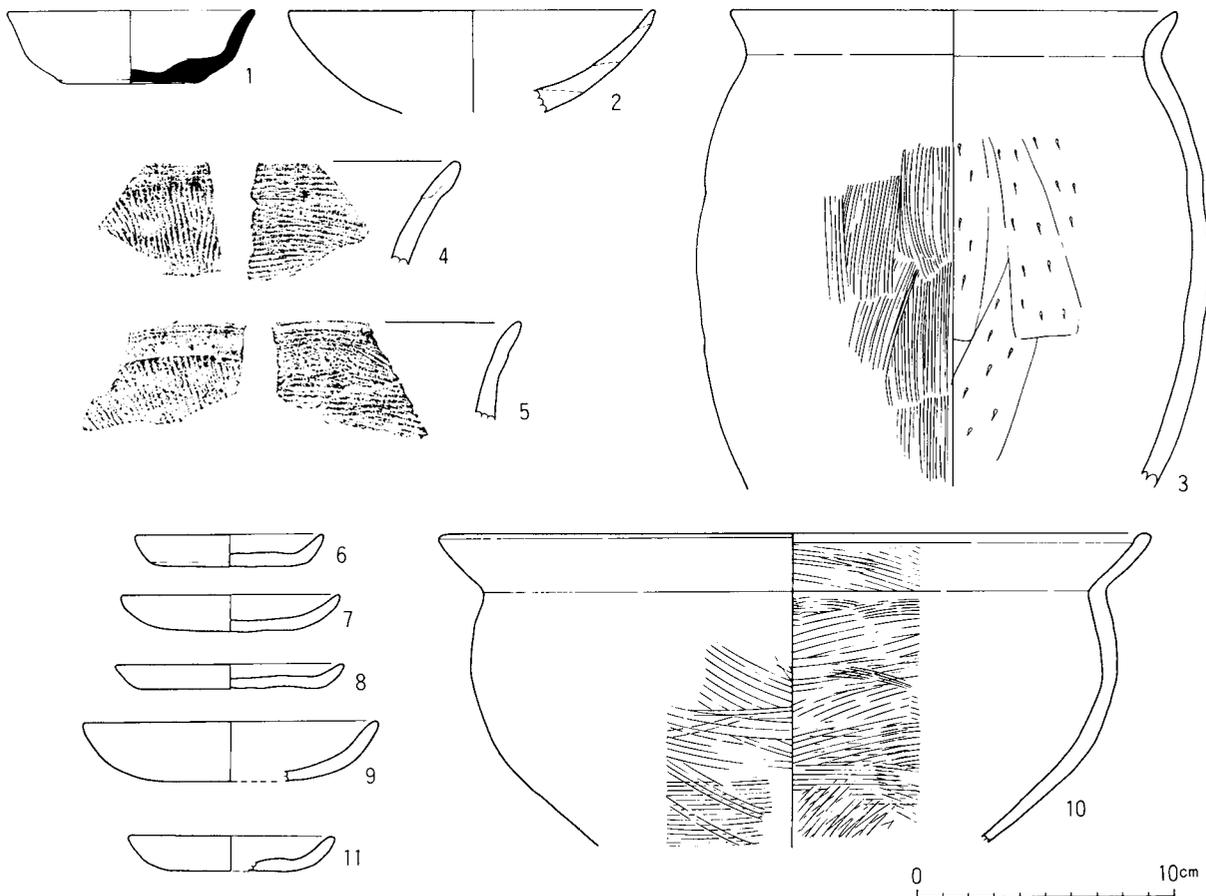
られる遺構は本遺構のみである。

北東コーナーで検出された焼土ブロック、炭化物を多量に伴なう浅い皿状の凹みについては一応炉址と考えておきたい。しかし、炉址は住居址中央部付近に設けられる例が多く、根拠はないのだが置きカマドの存在を考えたい。

第3号竪穴状遺構の時期は前述した通り、第33図1の須恵器無台坏が、柳田タンワリ1号窯跡(福島他1982)出土の無台杯身C類などに類似している点より7世紀第3四半期に位置付けられ、遺構もこの期と考えられる。他の遺物も同時期のものと考えられる。

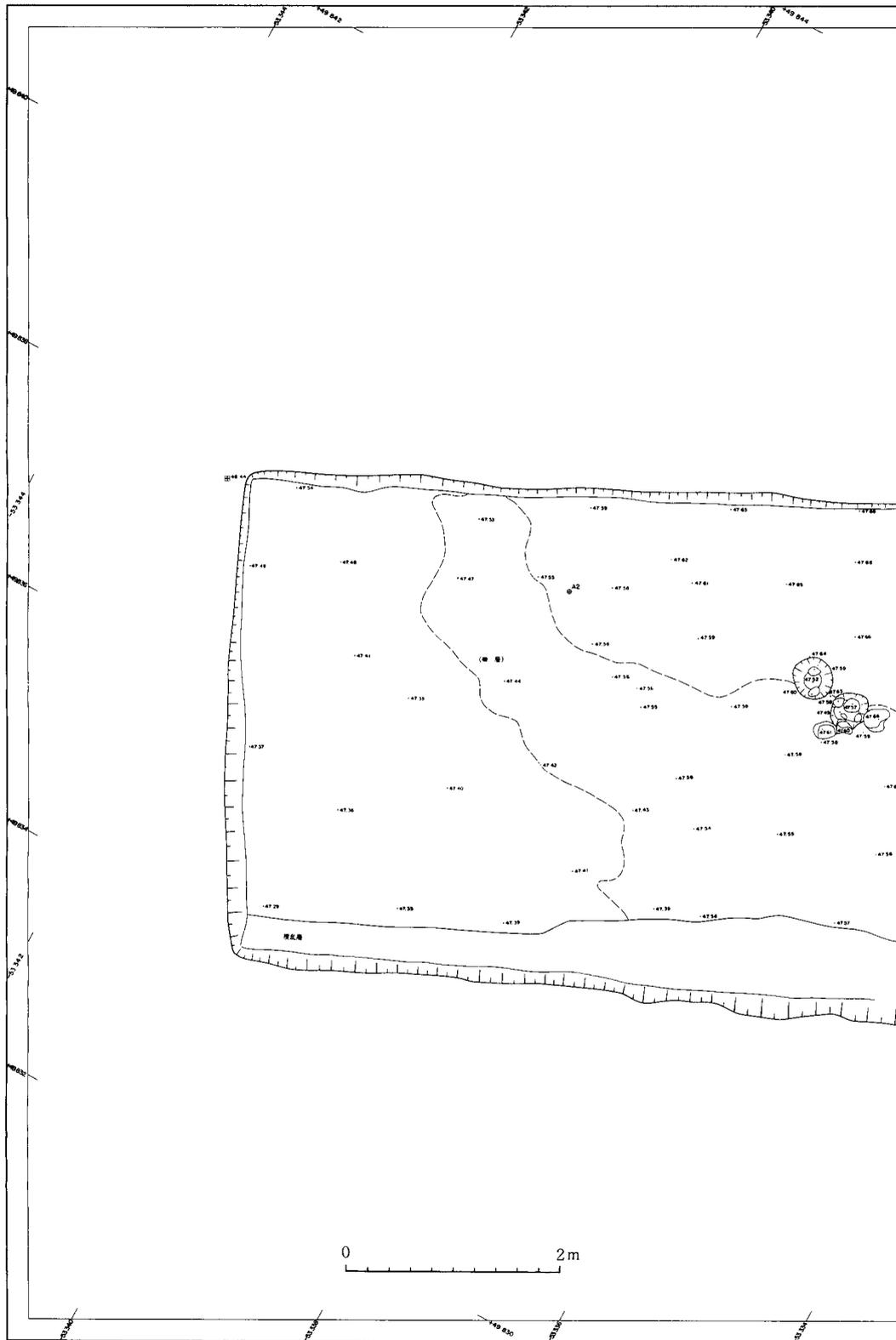
第1・2号竪穴状遺構は、陶磁器類が出土しておらず時期を決定しづらい。土師質土器は小皿が中ぶりのものと小ぶりのものがあり糸切り痕を持つものはない。これらは勅使館跡の報文(田嶋他1981)でII式とされたもの、永町ガマノマカリ遺跡の報文(越坂他1987)でII期とされたものの一部に類以しており、おおむね13世紀前半期のものと考えておきたい。埴についても調整、器形などがやや異なるが、永町ガマノマカリ遺跡第40号土坑から前述の小皿と共伴しており、該期の土師質土器の組成をなすものと考えられる。

これらの遺構・遺物の正確な年代的位置づけ、性格などは、類例の増加を待たねばならず今後の課題としておきたい。

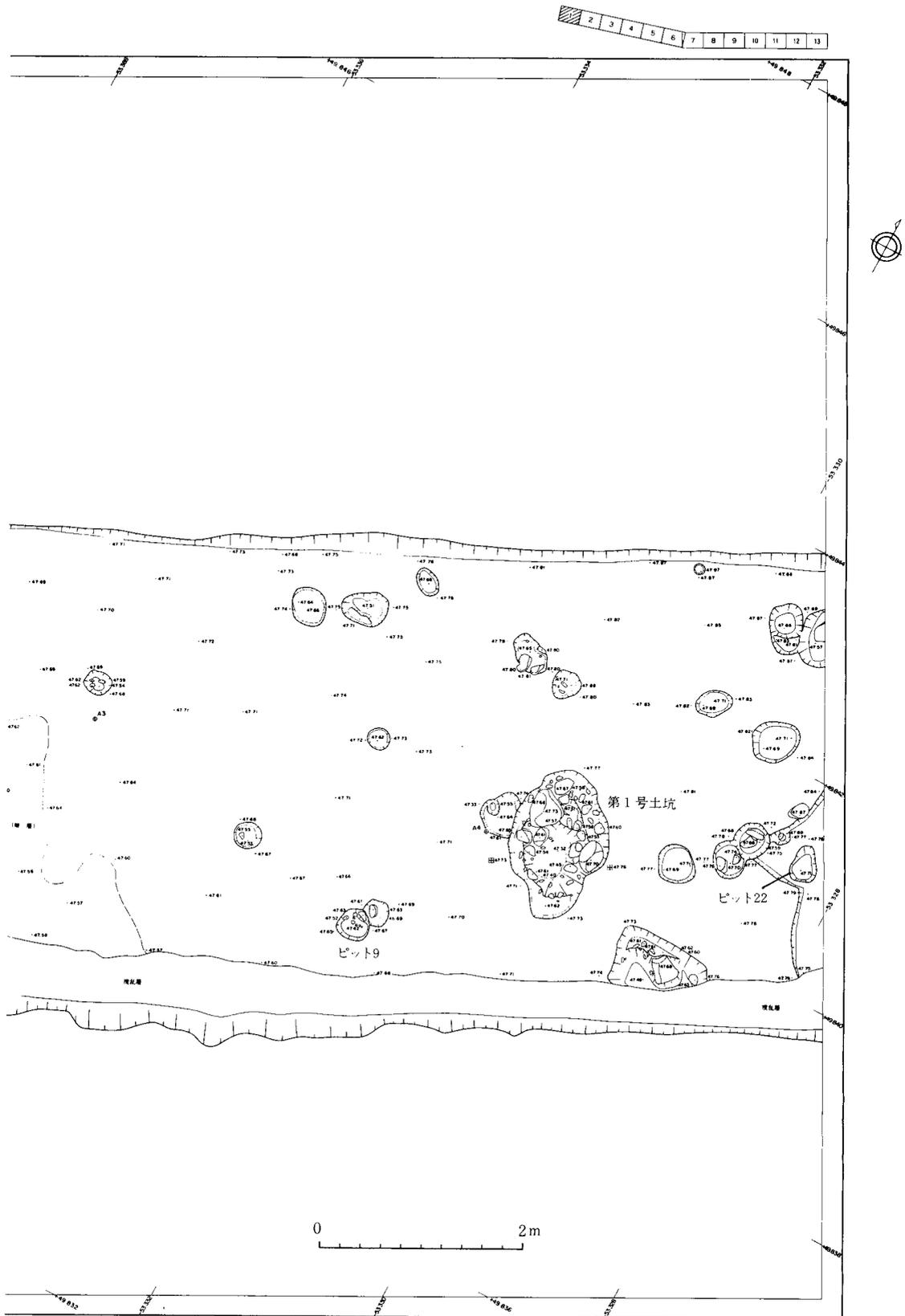


第7図 竪穴状遺構出土遺物実測図 (1～5 第3号竪穴状遺構
6～10 第1号竪穴状遺構 11 第2号竪穴状遺構 縮尺 1/3)

第 2 節 竖穴状遺構

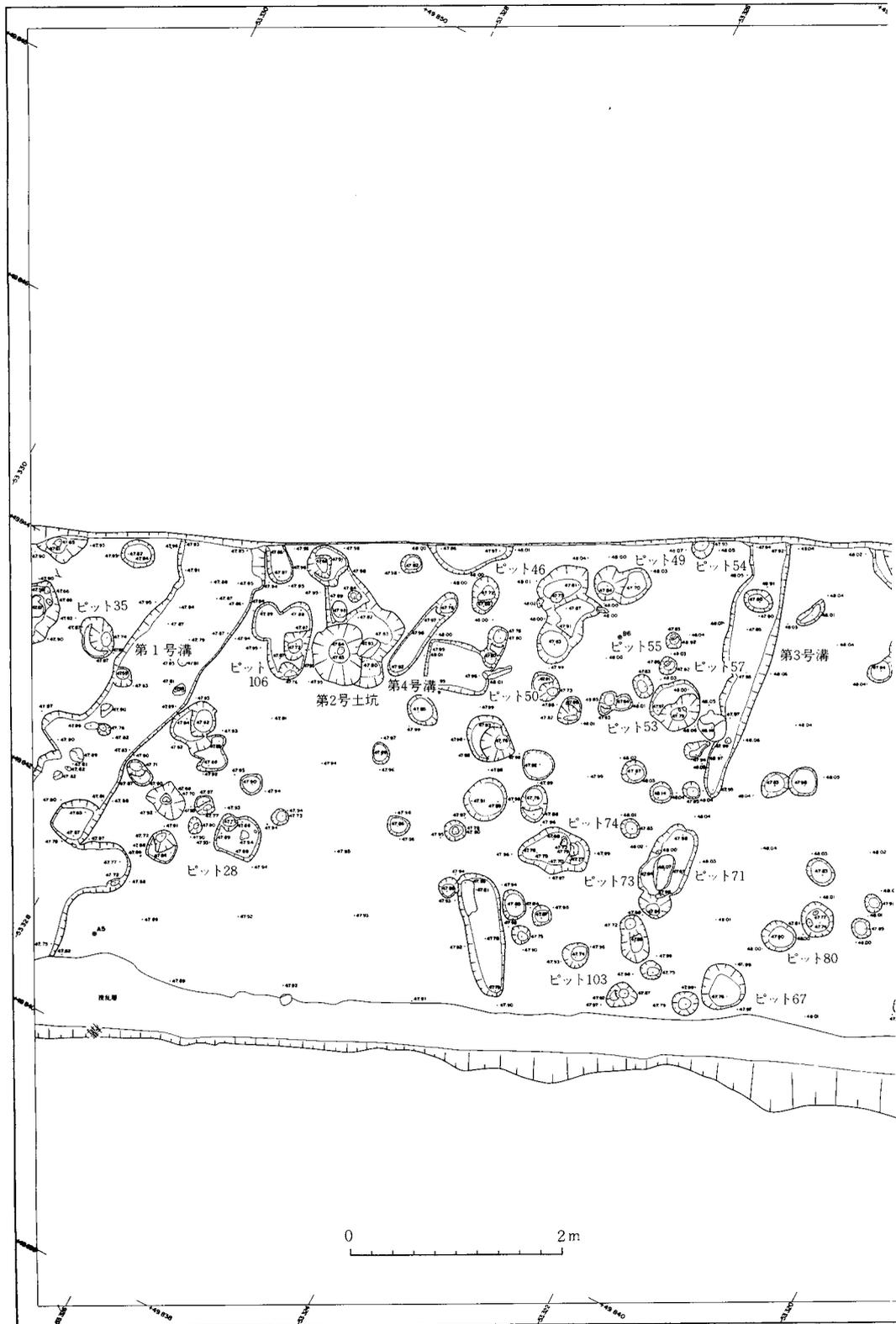


第 8 図 遺構平面図 1 (縮尺 1/60)

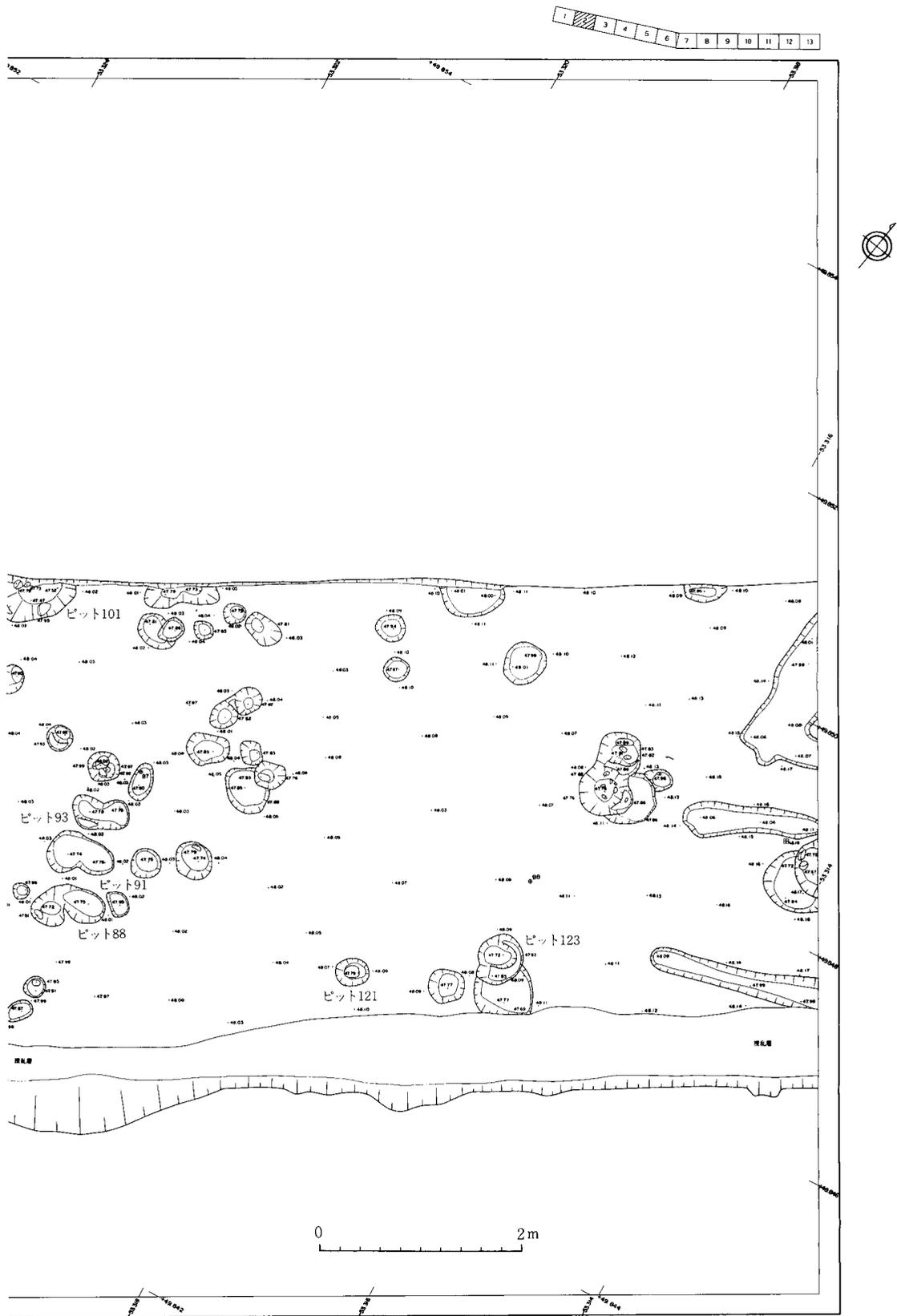


第9図 遺構平面図2 (縮尺 1/60)

第2節 竪穴状遺構

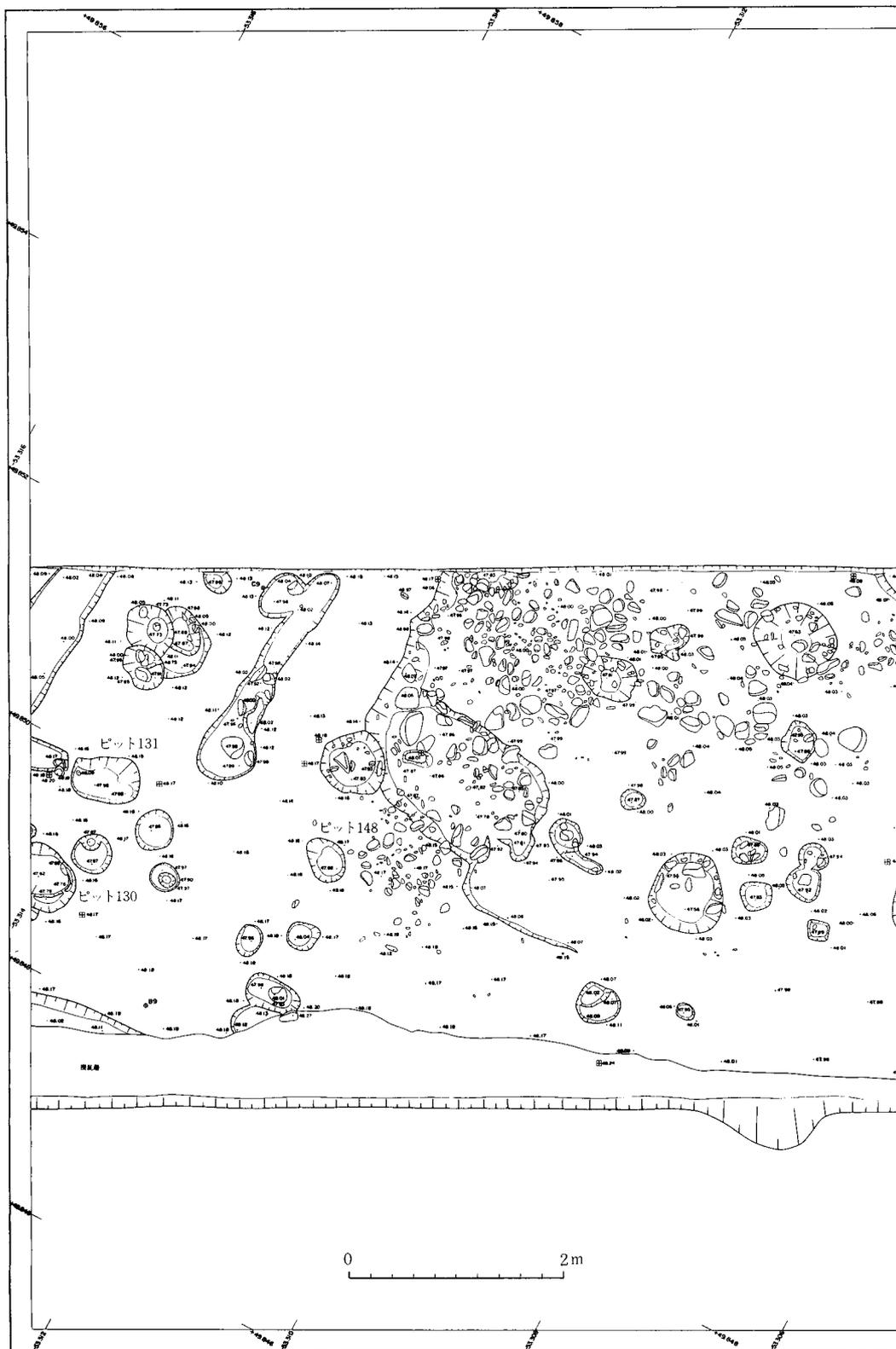


第10図 遺構平面図3 (縮尺 1/60)

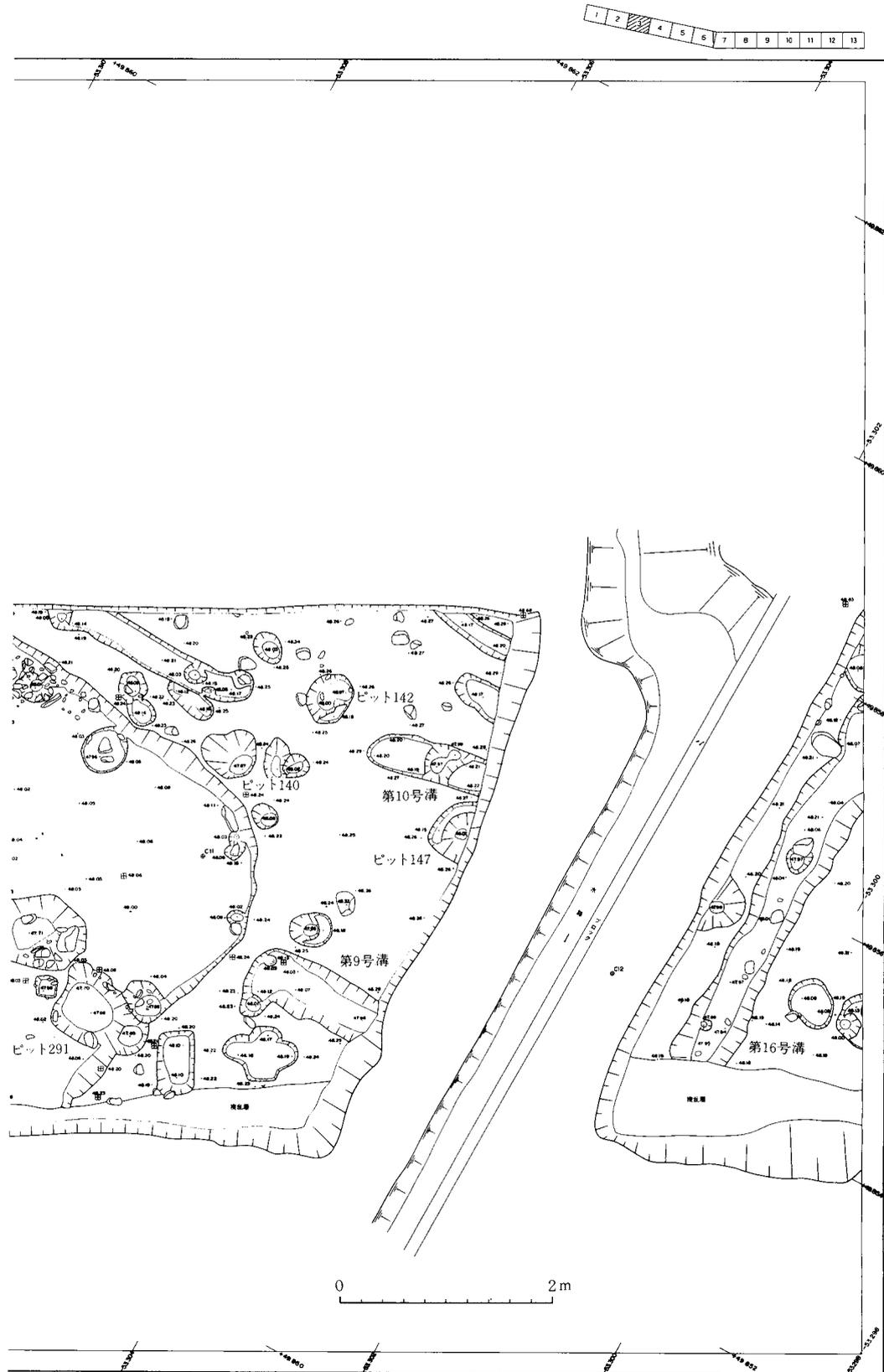


第11図 遺構平面図4 (縮尺 1/60)

第2節 竪穴状遺構

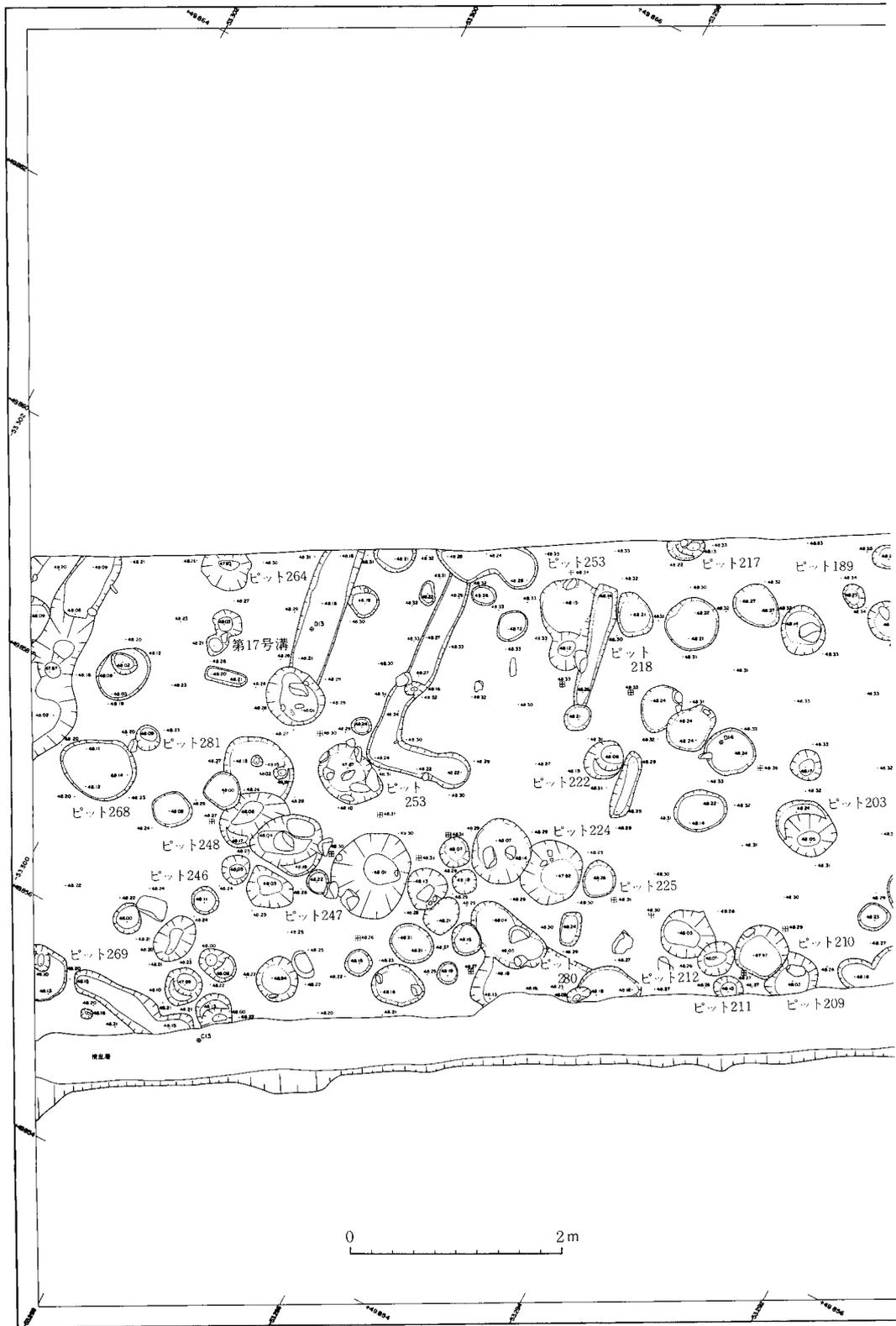


第12図 遺構平面図5 (縮尺 1/60)

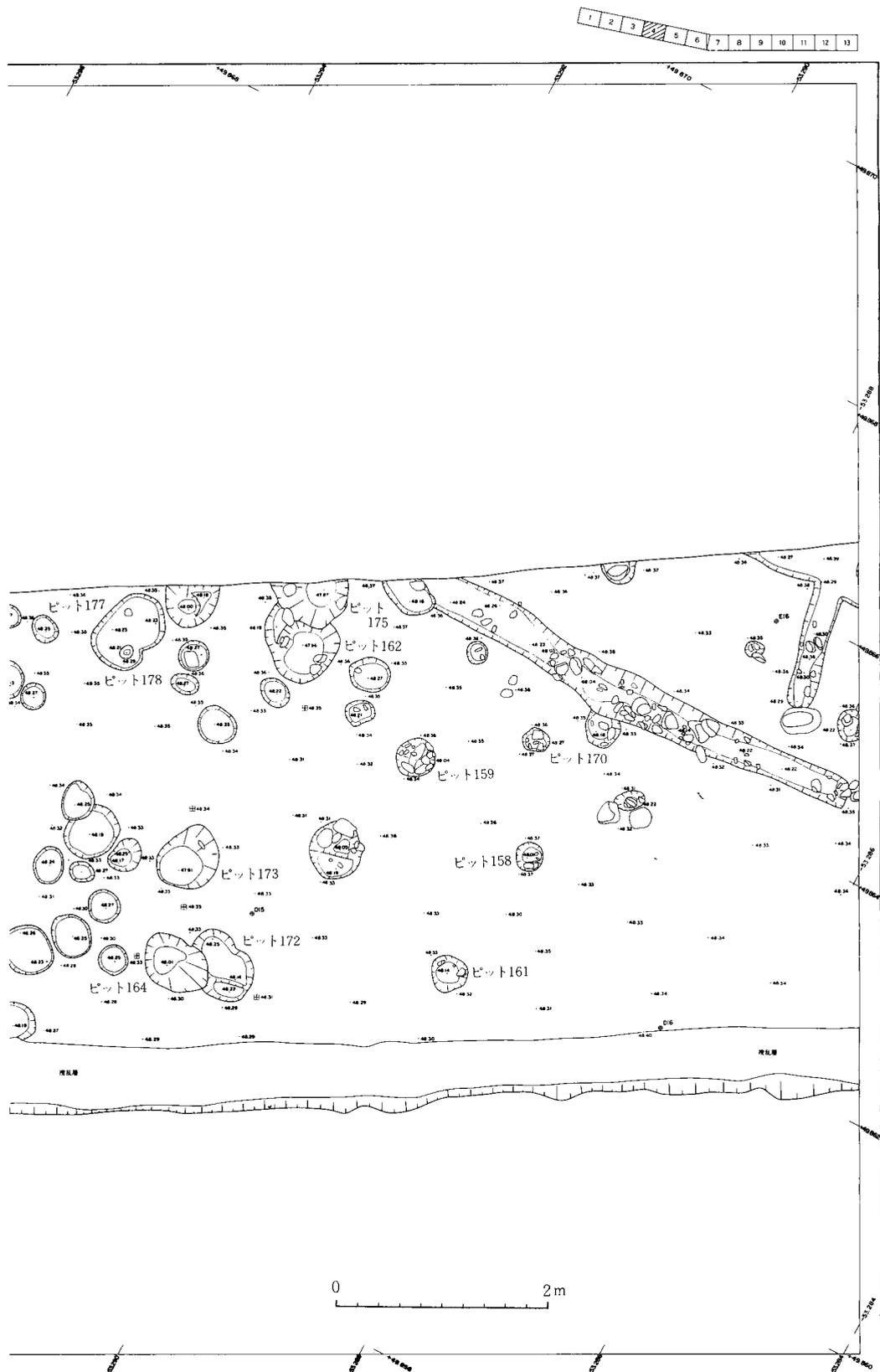


第13図 遺構平面図6 (縮尺 1/60)

第2節 竪穴状遺構

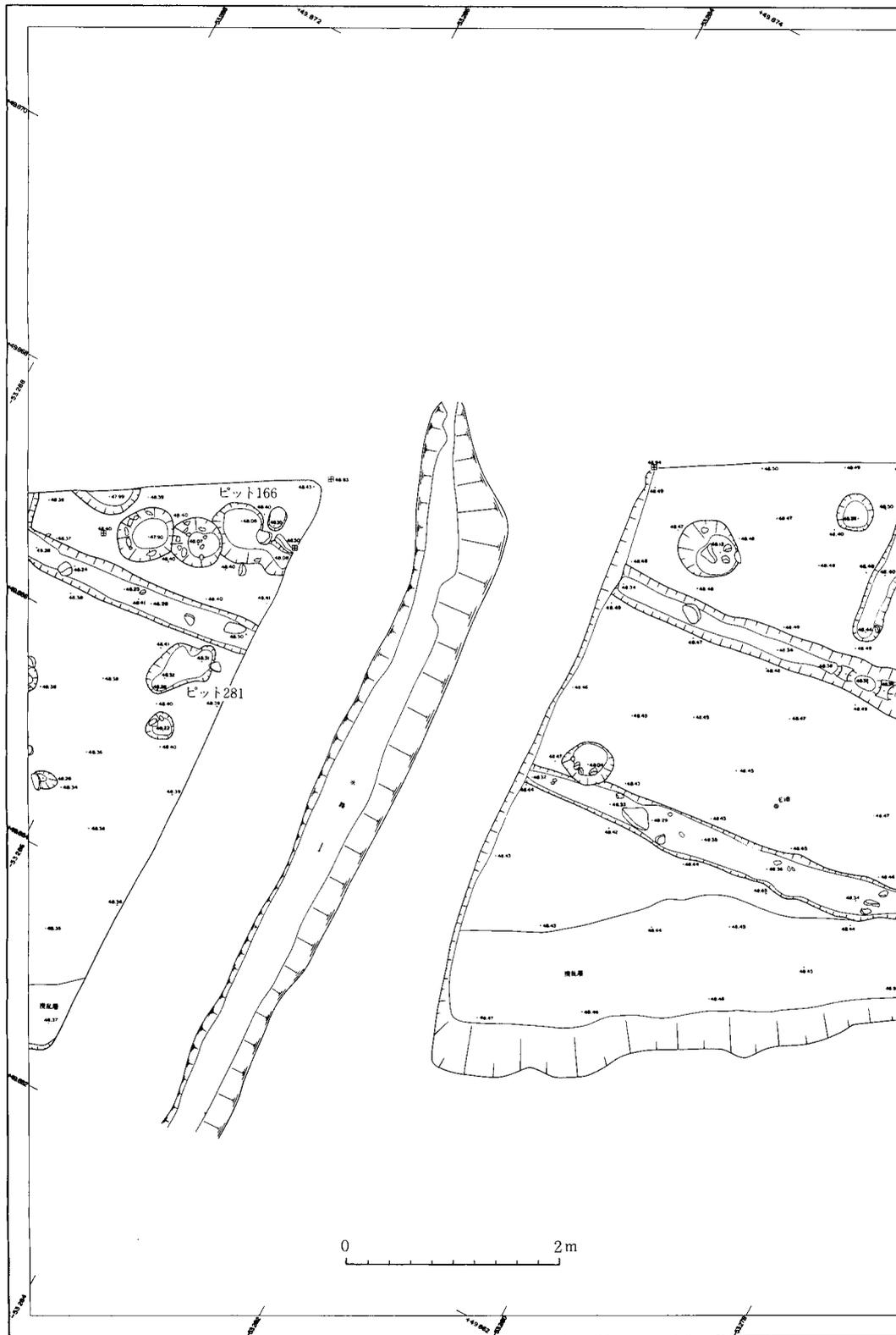


第14図 遺構平面図7 (縮尺 1/60)

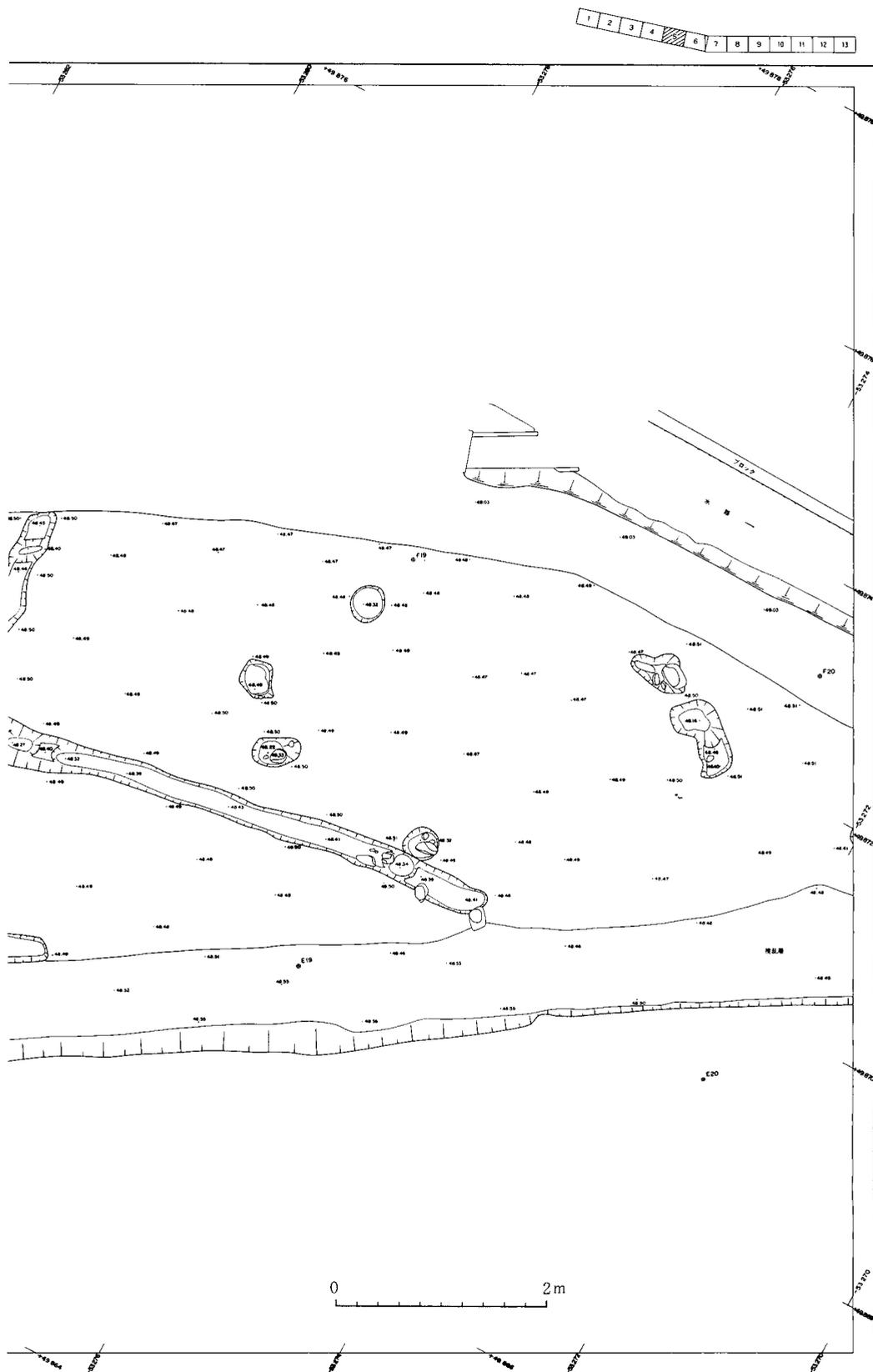


第15図 遺構平面図8 (縮尺 1/60)

第2節 竪穴状遺構

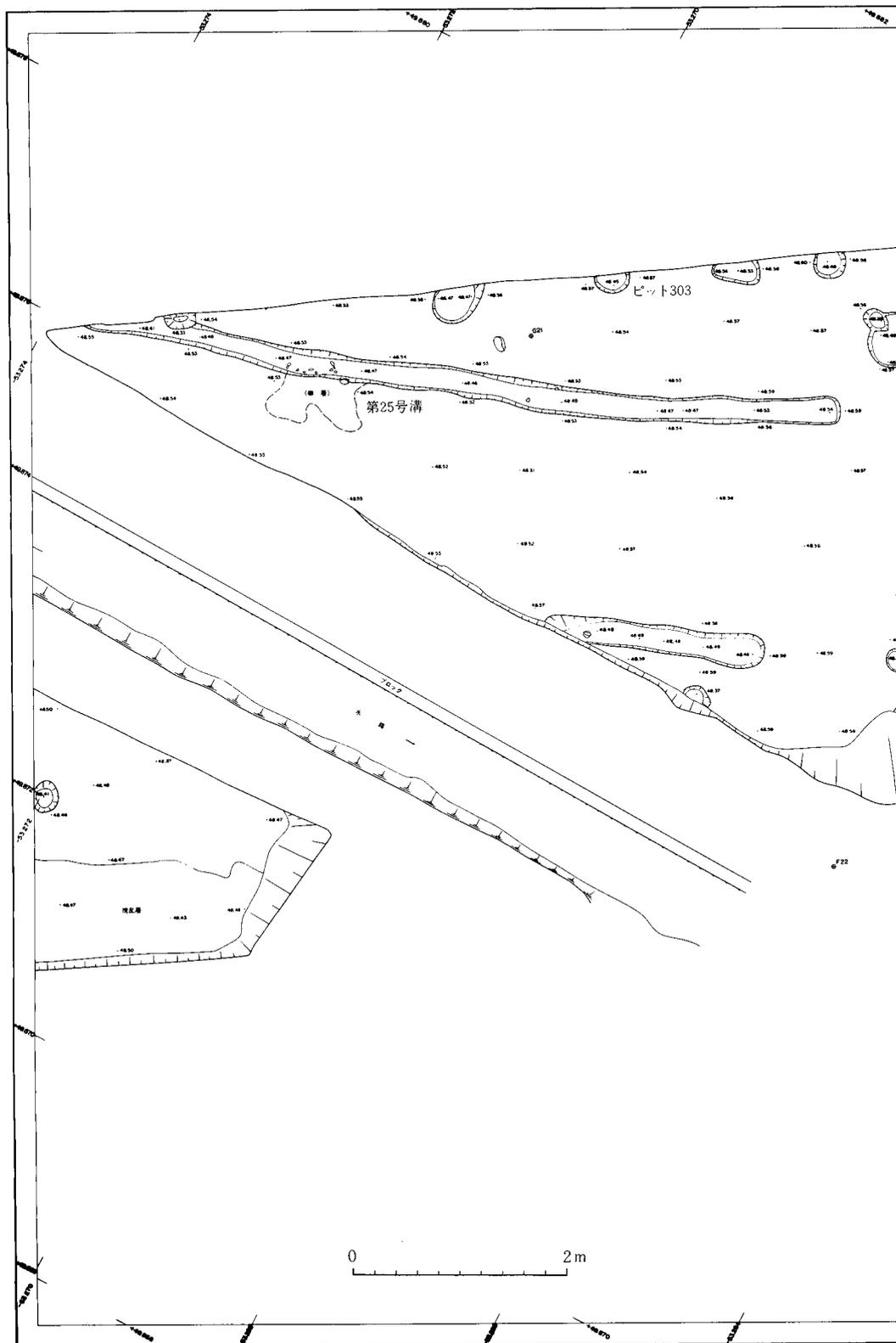


第16図 遺構平面図9 (縮尺 1/60)



第17図 遺構平面図10 (縮尺 1/60)

第2節 竖穴状遺構

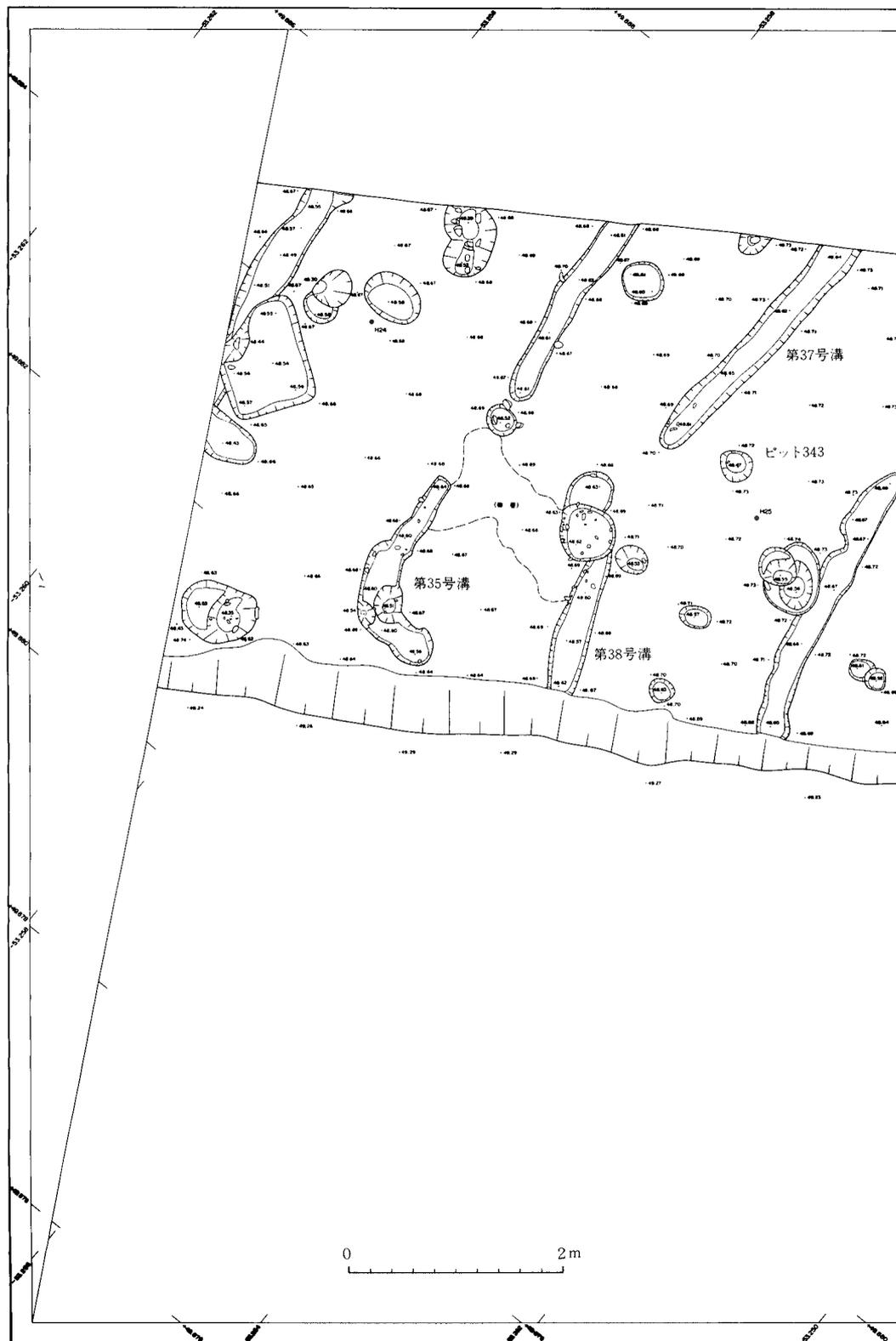


第18図 遺構平面図11 (縮尺 1/60)

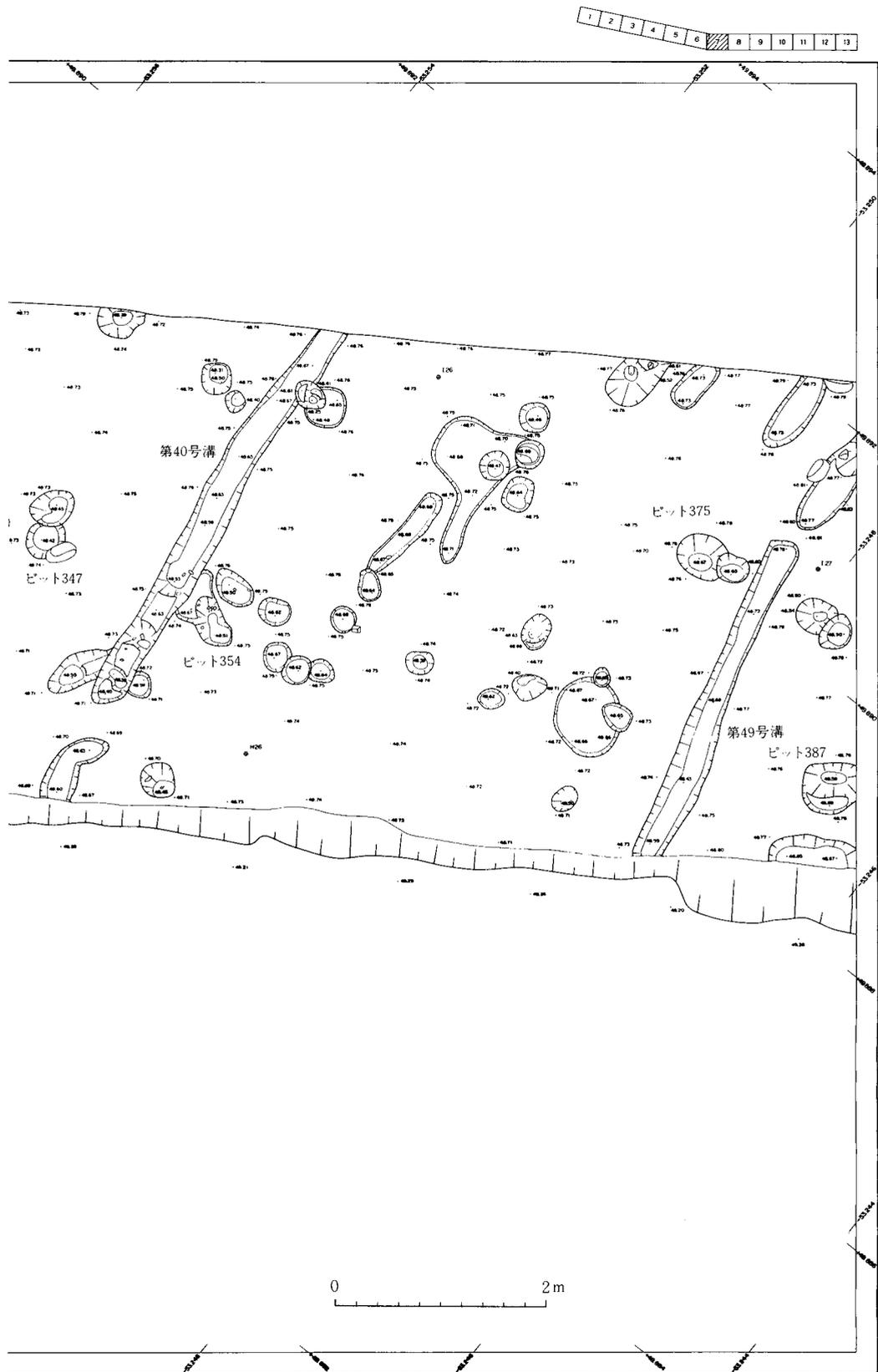


第19図 遺構平面図12 (縮尺 1/60)

第2節 竖穴状遺構

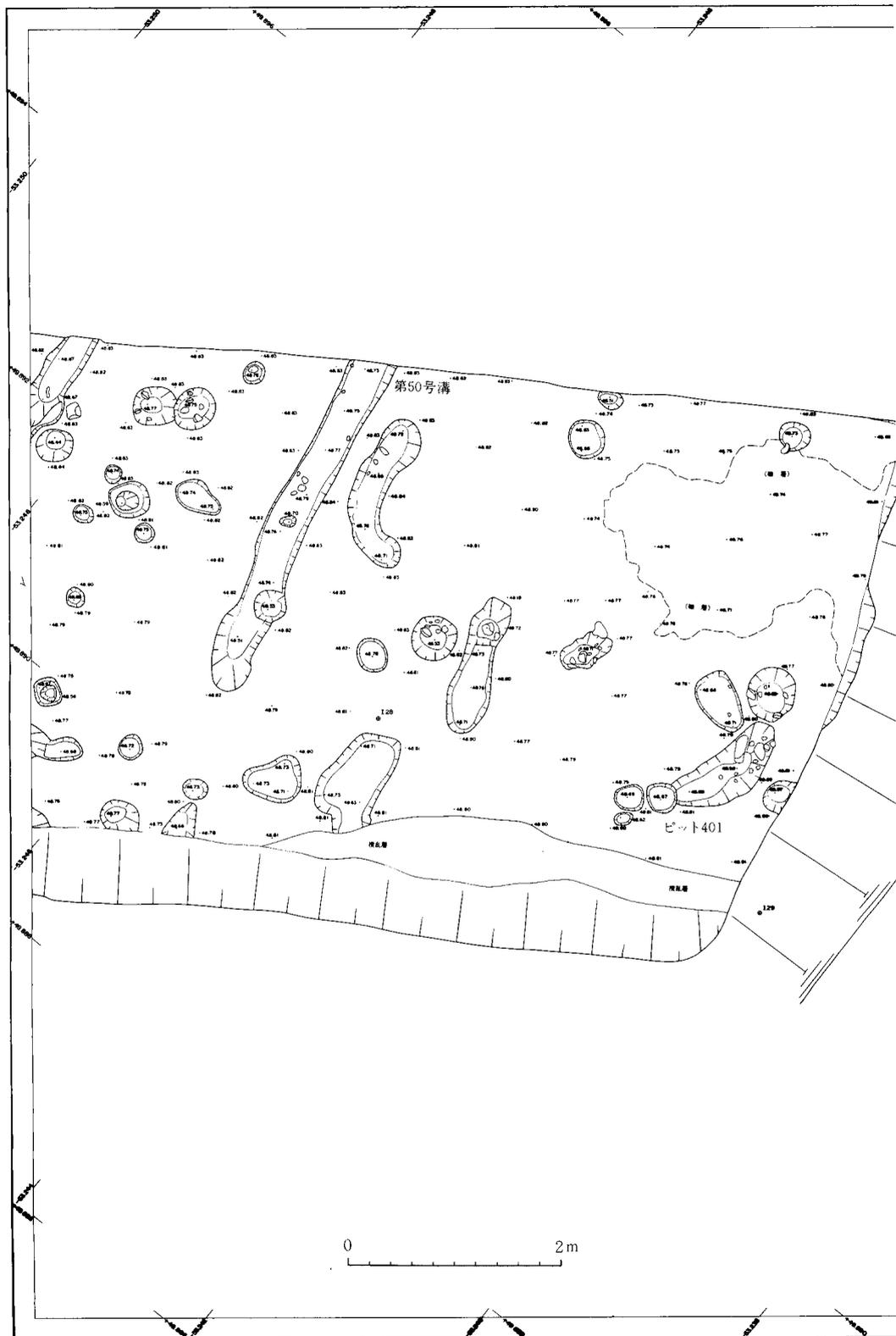


第20図 遺構平面図13 (縮尺 1/60)

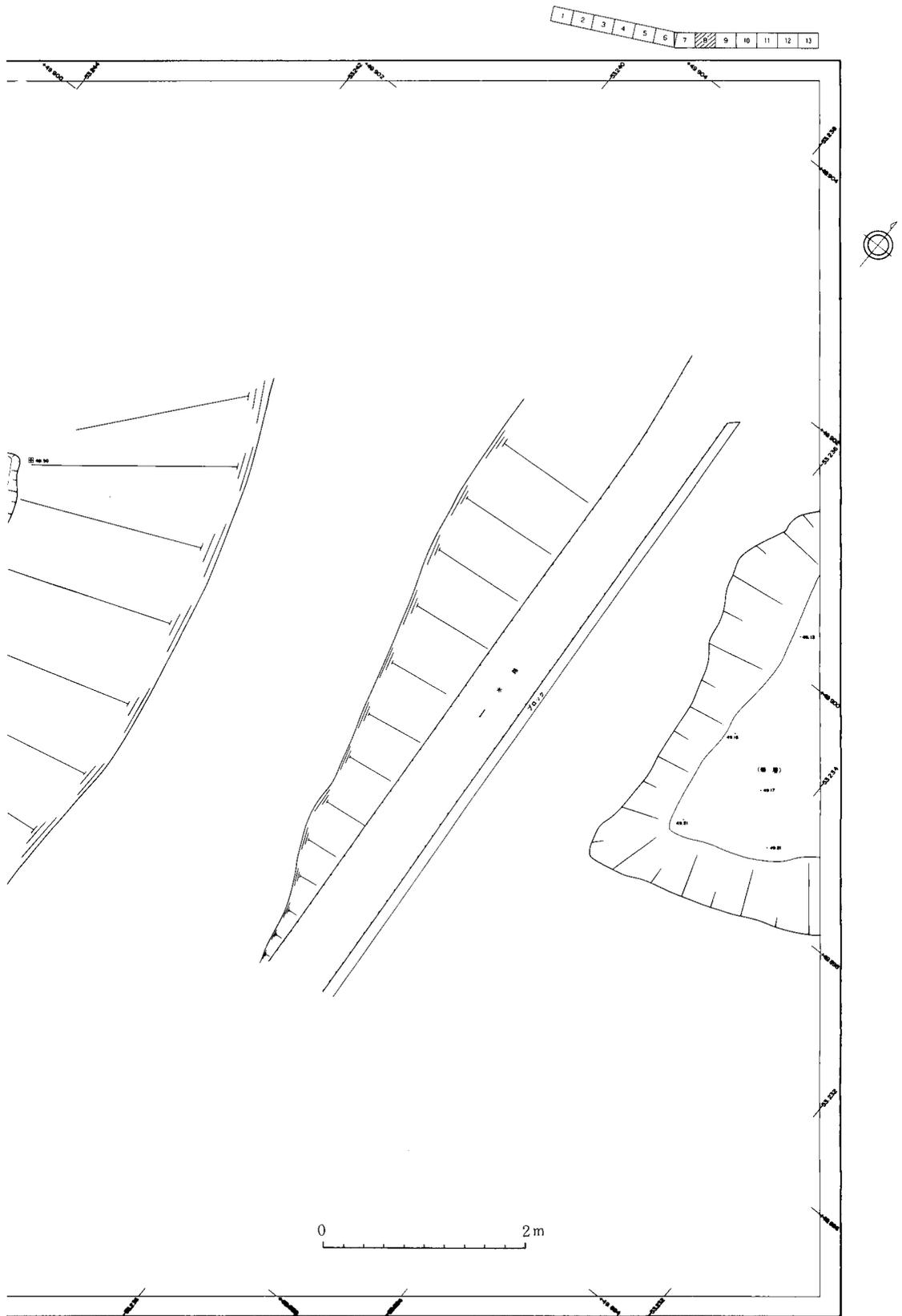


第21図 遺構平面図14 (縮尺 1/60)

第2節 竪穴状遺構

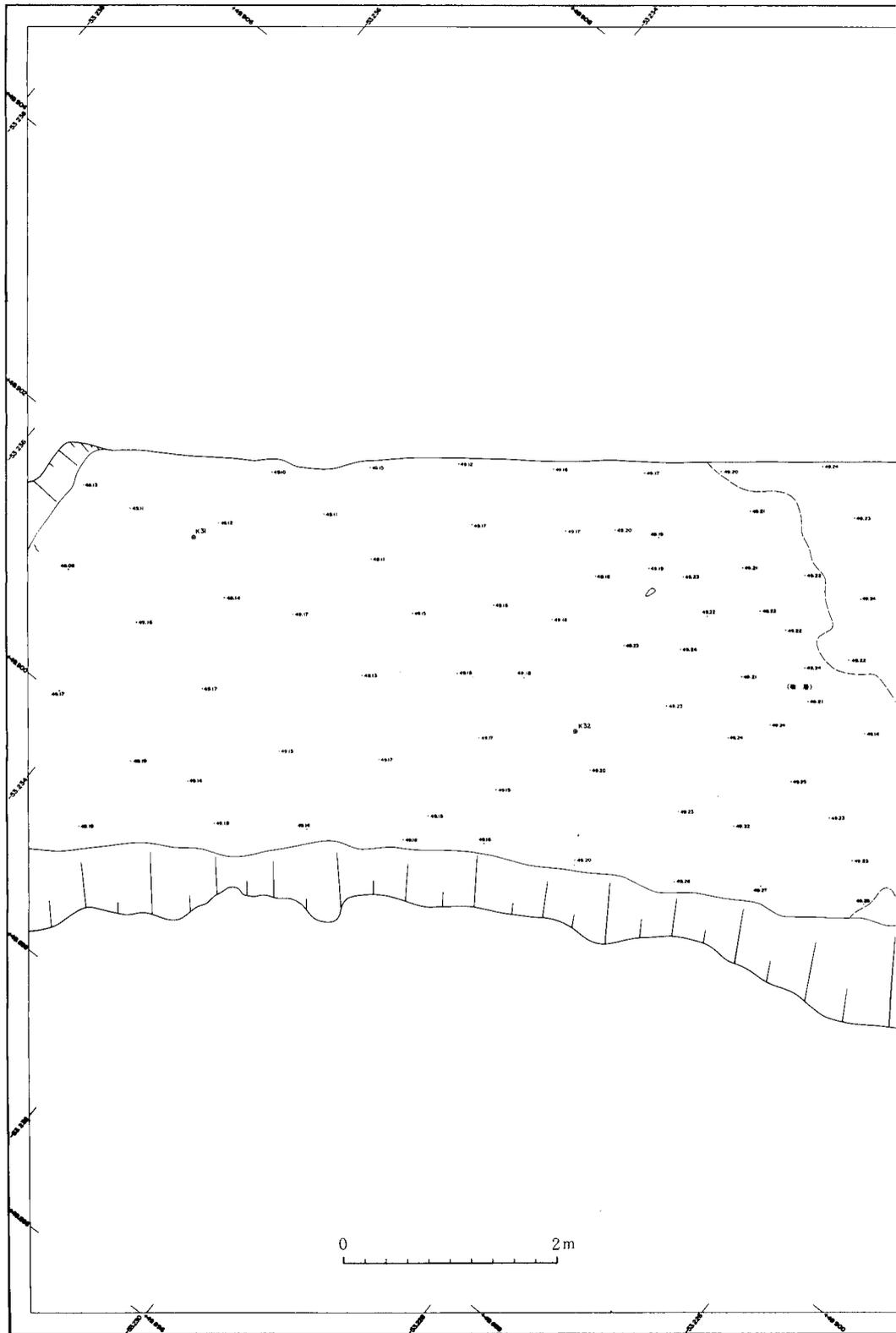


第22図 遺構平面図15 (縮尺 1/60)

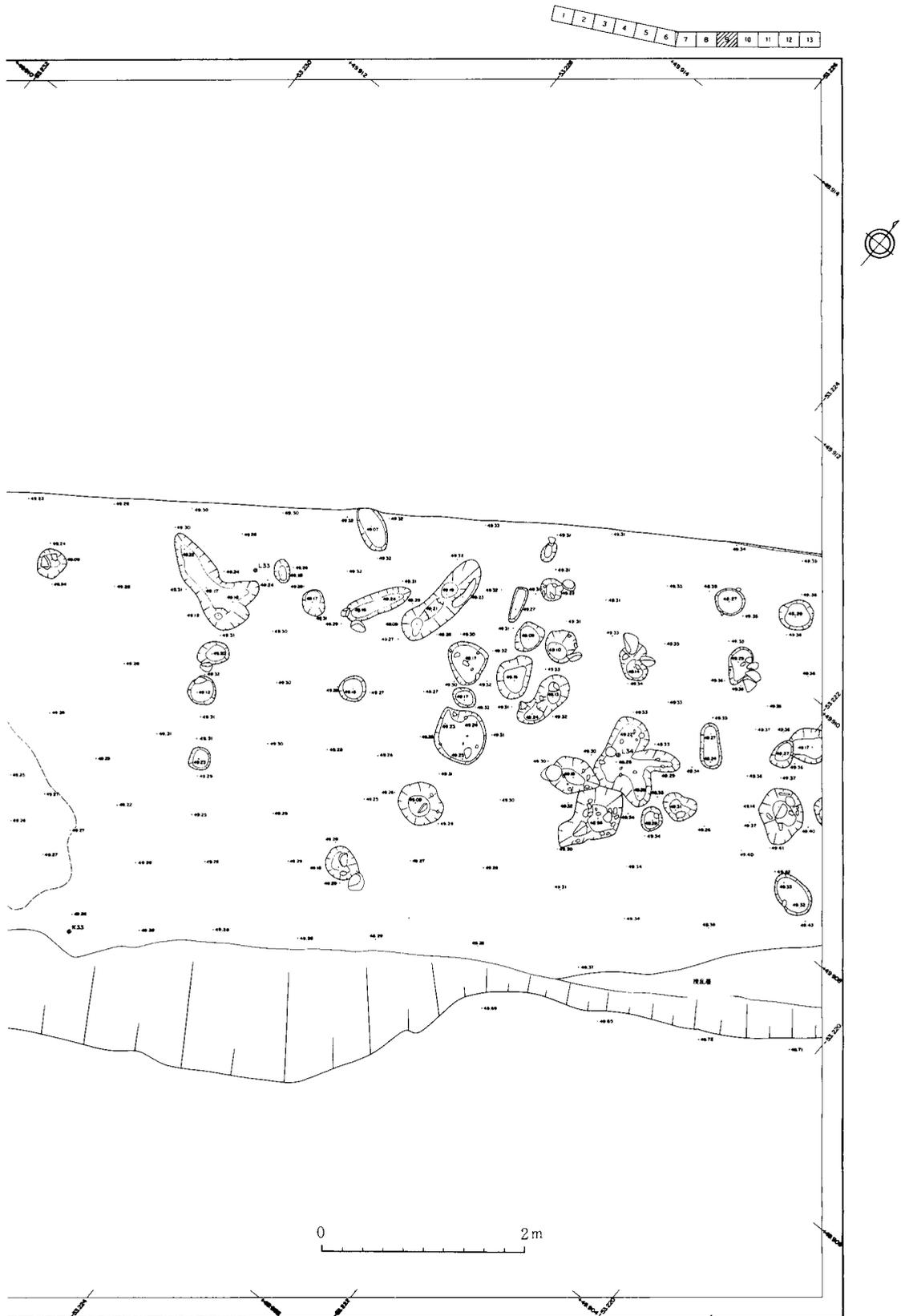


第23図 遺構平面図16 (縮尺 1/60)

第2節 豎穴状遺構

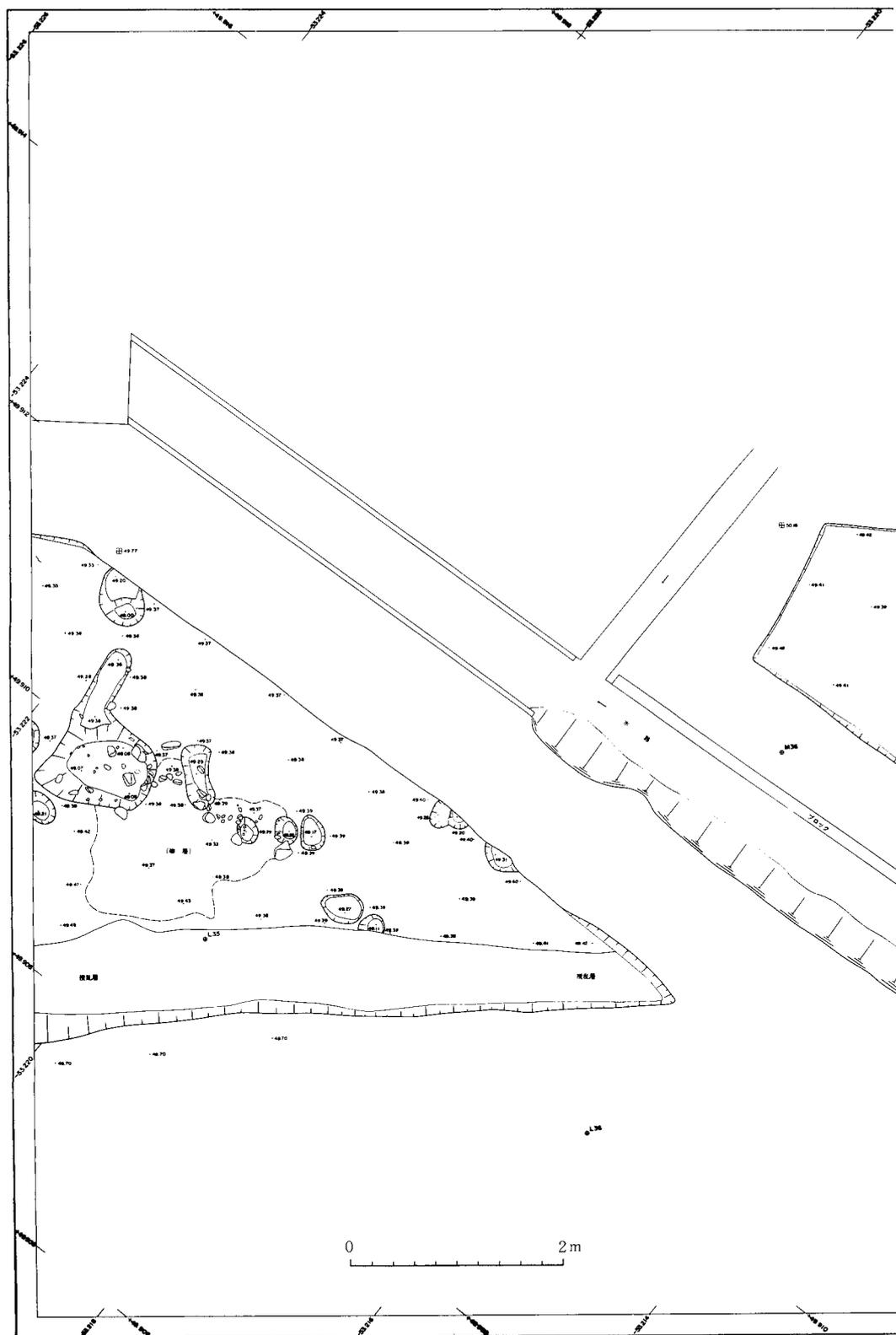


第24図 遺構平面図17 (縮尺 1/60)

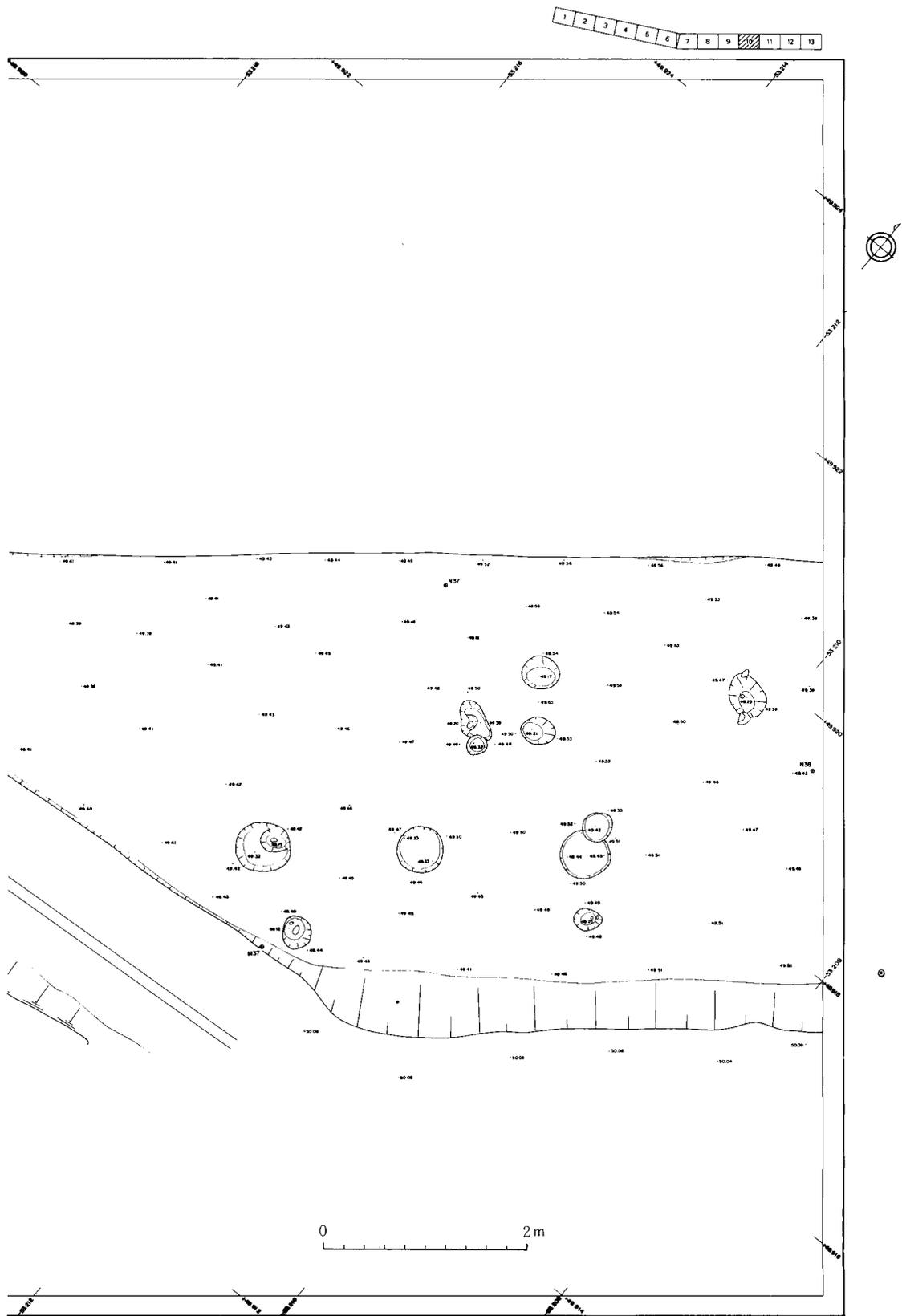


第25図 遺構平面図18 (縮尺 1/60)

第2節 竖穴状遺構

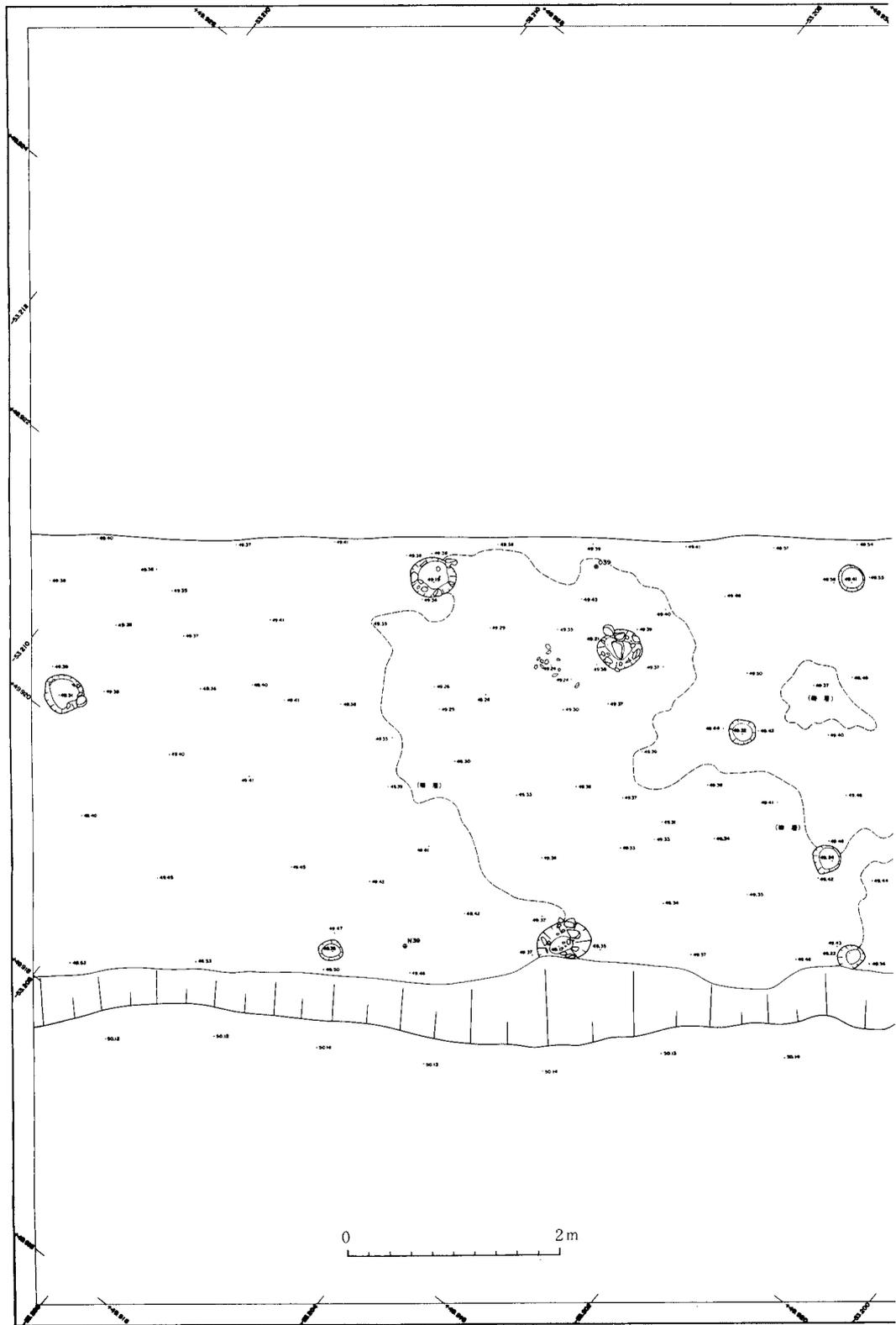


第26図 遺構平面図19 (縮尺 1/60)

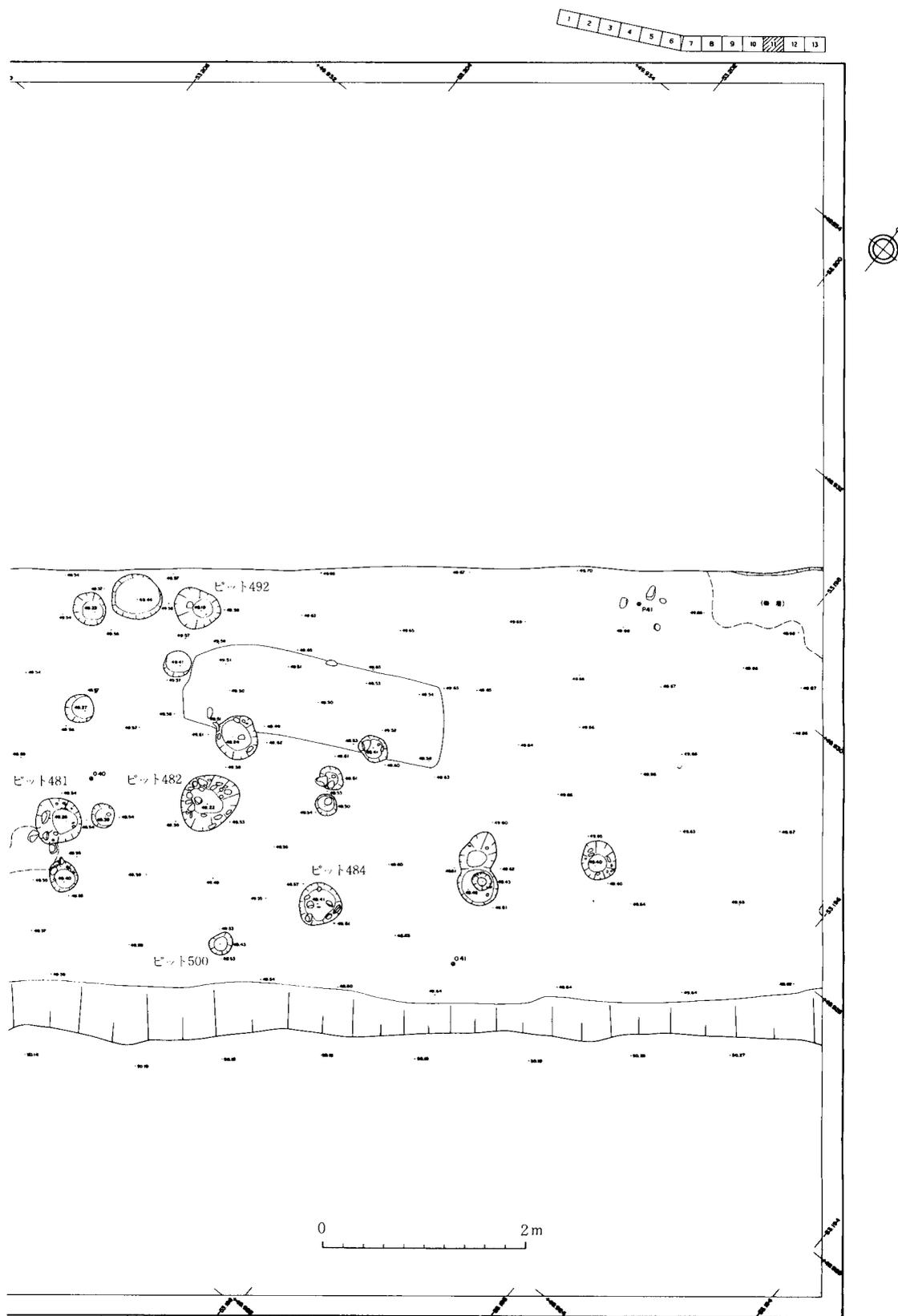


第27図 遺構平面図20 (縮尺 1/60)

第2節 竖穴状遺構

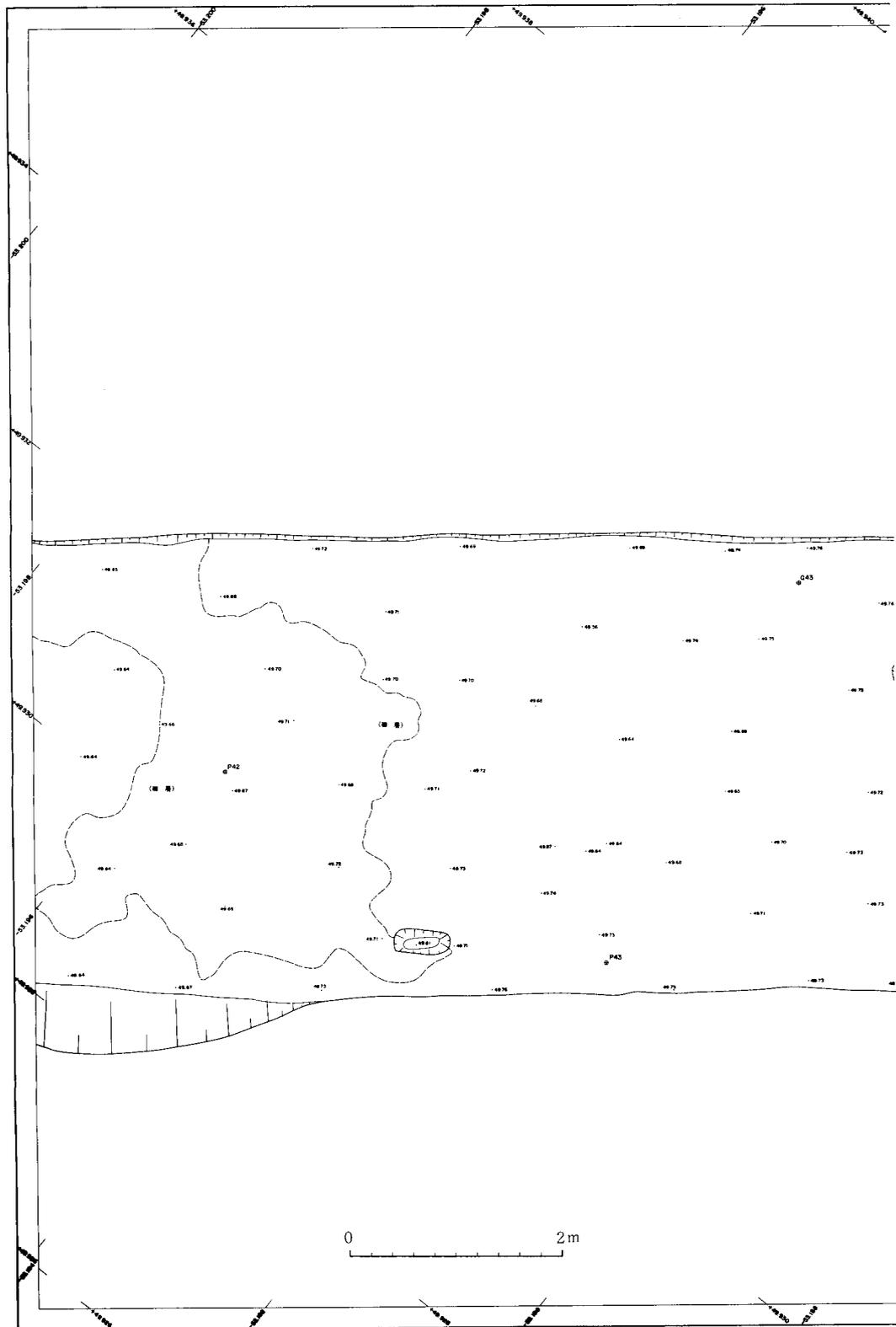


第28図 遺構平面図21 (縮尺 1/60)

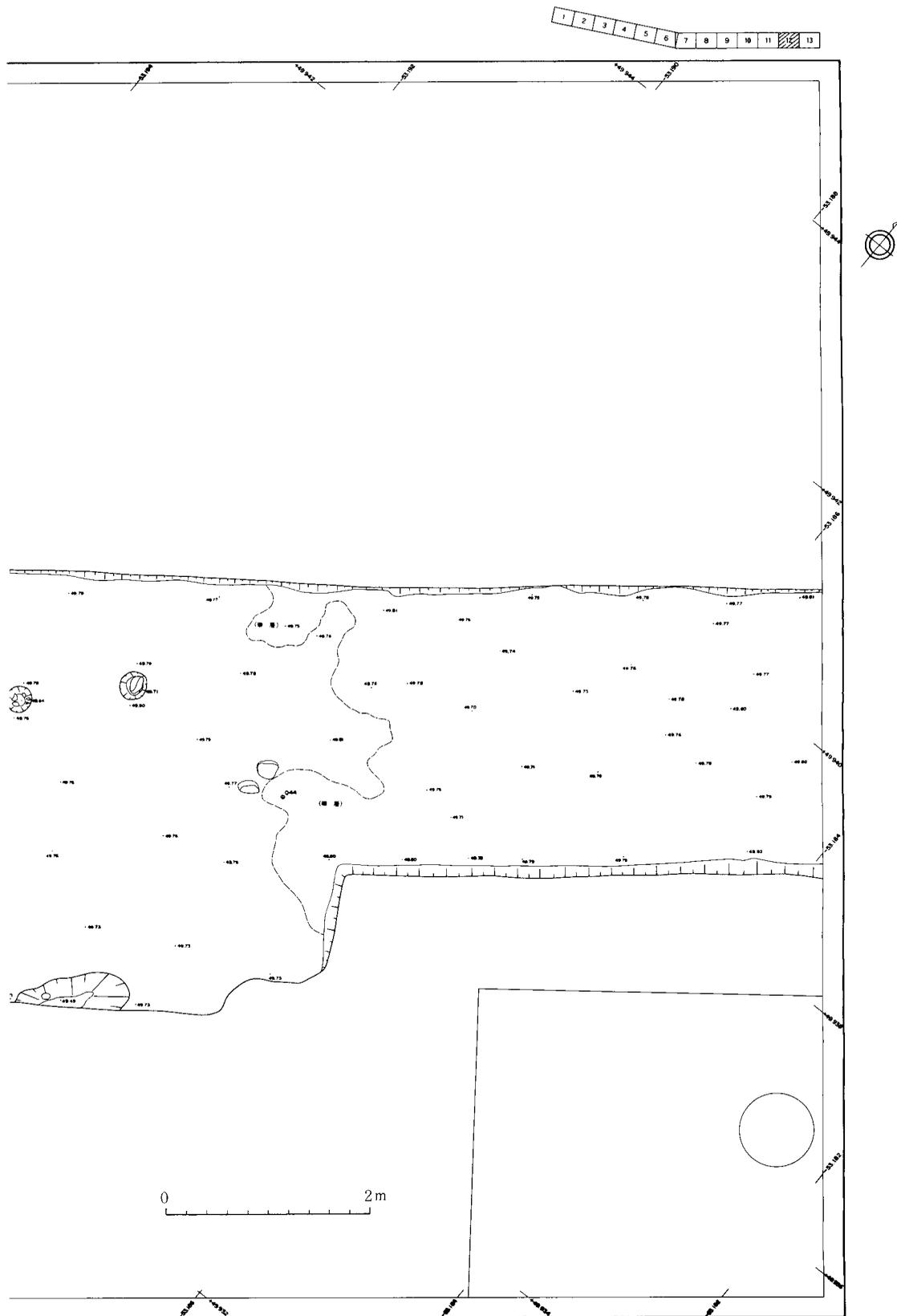


第29図 遺構平面図22 (縮尺 1/60)

第2節 竖穴状遺構

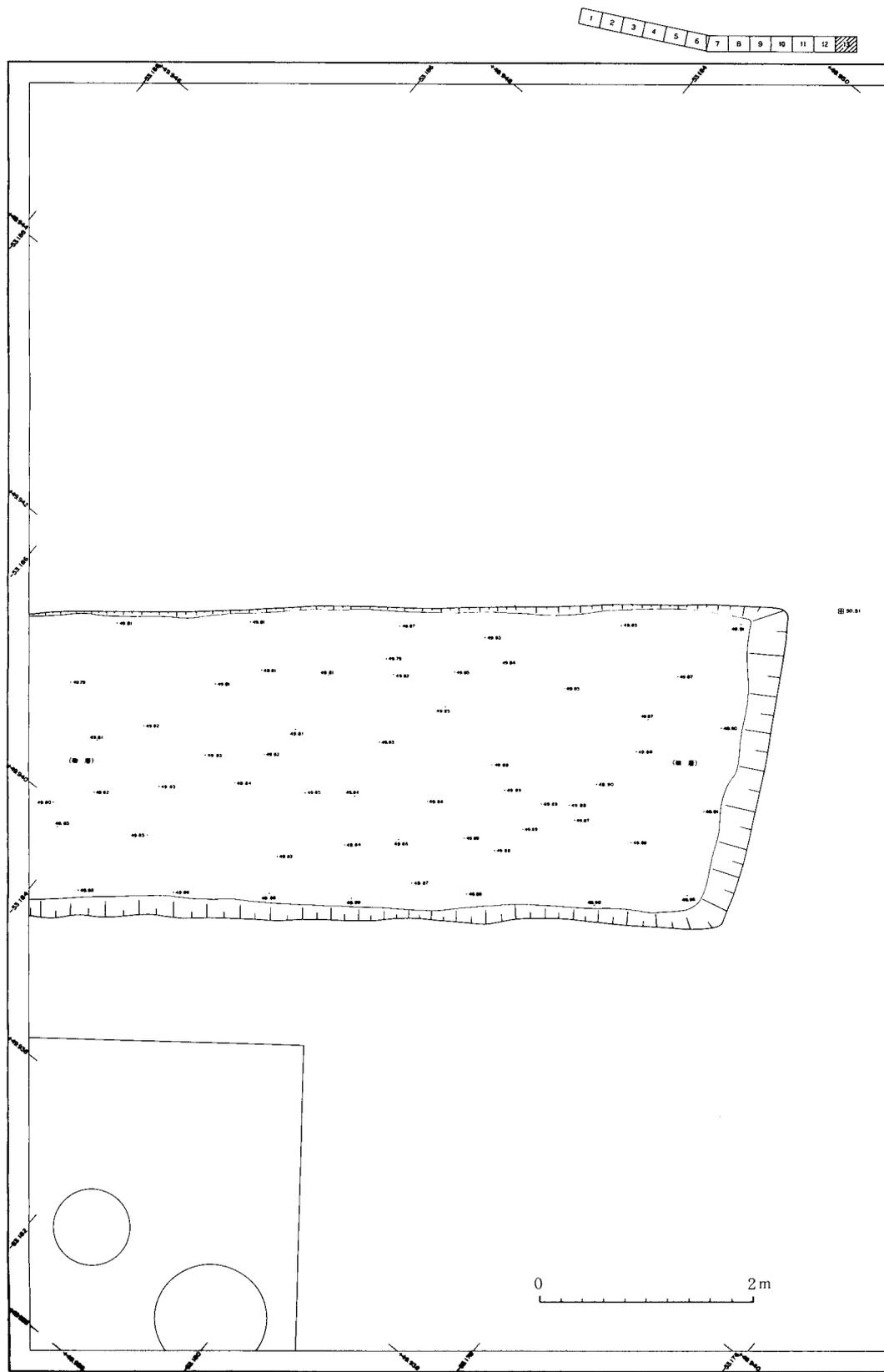


第30図 遺構平面図23 (縮尺 1/60)

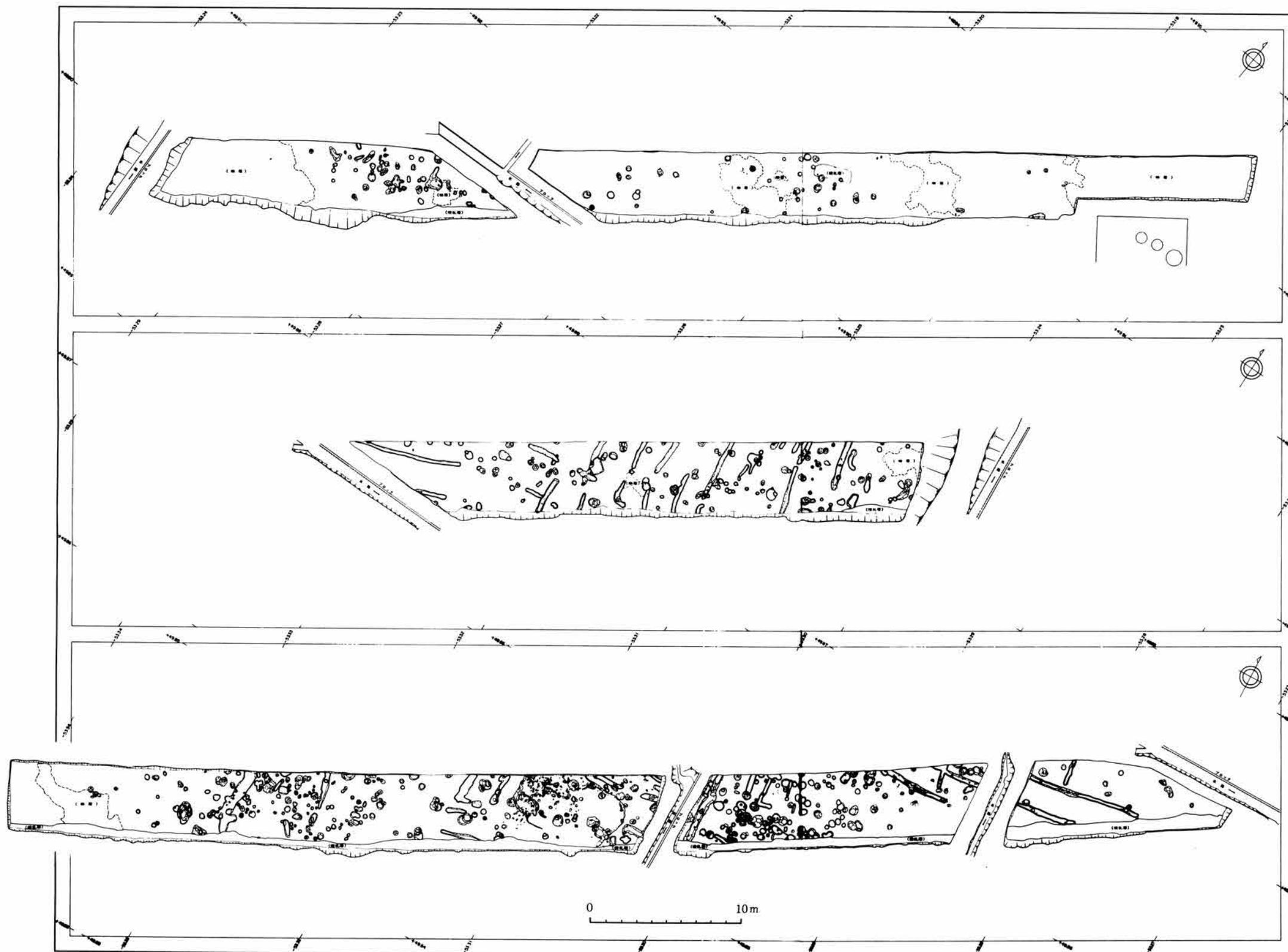


第31図 遺構平面図24 (縮尺 1/60)

第2節 竪穴状遺構



第32図 遺構平面図25 (縮尺 1/60)



第33図 遺構全体図 (縮尺 1/300)

第5章 遺物

(第2・3表, 第34~38図, 図版16・17・18下)

第1節 縄文時代の遺物 (第2表, 第34~36図, 図版16)

1. 土器

本遺跡出土の縄文土器については、形態学的特徴からI群土器(縄文中期土器)とII群土器(縄文後期土器)の2群に大別される。数量的には、土器片が200点余り確認されたにすぎず、I群がII群をやや上回っている。

出土状態については、ごくわずかに遺構に伴うものもみられるが、そのほとんどは第4層からの出土であり、B・C区では第5層から出土している。遺物が出土したグリッドは、第34図のグリッド配置図において黒印で表してある。

(1) I群土器(縄文中期土器)

第1類 半隆起線文とへら状施文具による斜位格子目文を施すもの(第35図1)。褐色で砂粒をやや含む。

第2類 半隆起線文のものである(第35図2)。胎土中の砂粒は少なく、暗褐色を呈し、器厚は8mmである。

第3類 平行する半隆起線文を口縁部にめぐらし、胴部には無節の縄文を施すものである(第35図14)。口縁部の外反する深鉢であり、口径28.5cm、現存値で器高は30.0cmを測る。黒褐色~橙褐色、器厚は1.2~1.5cm。

第4類 粘土紐を貼付するものである(第35図3)。色調は橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

第5類 半截竹管の背によるものか、貼付された粘土紐上には圧痕文が施され、頸部以下にはRLの縄文が施文されているものである(第35図4)。胎土中にはやや砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。

第6類 縄文・捺糸文を主文様とするものであり(第35図5~13)、このうちの5~8が口縁部片である。

6つの類に分けられたI群土器のうち、第1類は中期前葉新保式であろう。第3~6類については、中期中葉から中期後葉にかけての時期に属するものと推測される。口縁部片は9点である。

(2) II群(縄文後期土器)

第1類 「く」の字に内屈する口縁部片である(第35図15・16)。15は口縁外面に断面がやや鋭い平行沈線が4条みられ、内外面ともにへら研磨され、色調は赤褐色を呈する。胎土は堅緻で焼成も良好である。16は沈線と縄文がみられ、沈線はやや幅広気味で浅いものである。胎土中にはやや砂粒を含み、黒褐色~淡褐色を呈する。

第2類 羽状縄文を主文様とするものである(第35図18~20)。器厚は6mm前後を測り、胎土・焼成とも良好であり、色調は暗褐色・黄褐色を呈する。

第3類 楯状施文具で円形や平行の沈線が描かれたものである(第35図17)。

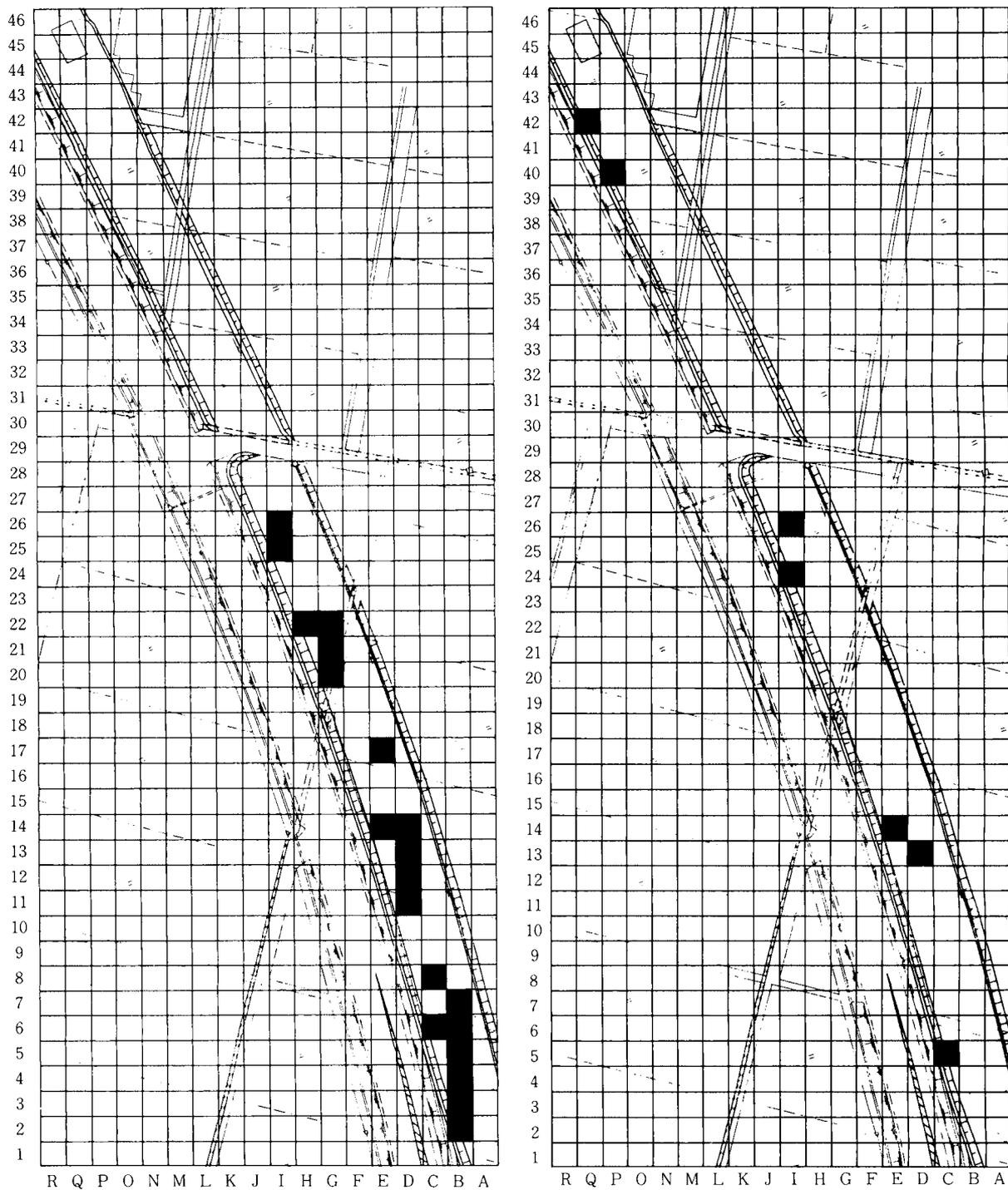
第4類 縄文と横位の平行沈線文を主文様とするものである(第35図21~27)。22は口縁内面にも縄文を置く。

第5類 細かい縄文と斜位・横位の平行沈線文を施すものである(第35図28)。外面全体に煤が付着し、黒色を呈する。器厚は7mmを測る。

第6類 底部を一括し、この類を設けた(第35図29~33)。29・30には網代圧痕が認められ、29は「2本超え2本潜り1本ズレ」であり、質感からタテ条・ヨコ条ともに同一素材の原体であると推測され、幅3~4mmである。30も29と同じ編み方で原体幅は8~10mmである。

II群土器各類の時期に関しては、第1・2・4類は後期中葉の酒見式であり、第3類の所属時期も後期中葉であろう。第5類は後期前葉気屋II式である(米沢1986)。第6類はII群に含めて記述を進めたが、細かな時期は不詳であり、I~II群に属するものと考えの方が適当であろう。口縁部片は5点である。

第1節 縄文時代の遺物



第34図 縄文時代の遺物出土状況図（左 縄文土器 右 石器）



第35図 縄文土器拓影 (縮尺 1/3)

第1節 縄文時代の遺物

第2表 打製土掘具一覧表

単位はcmおよびg、()を付したものは現在値を示す

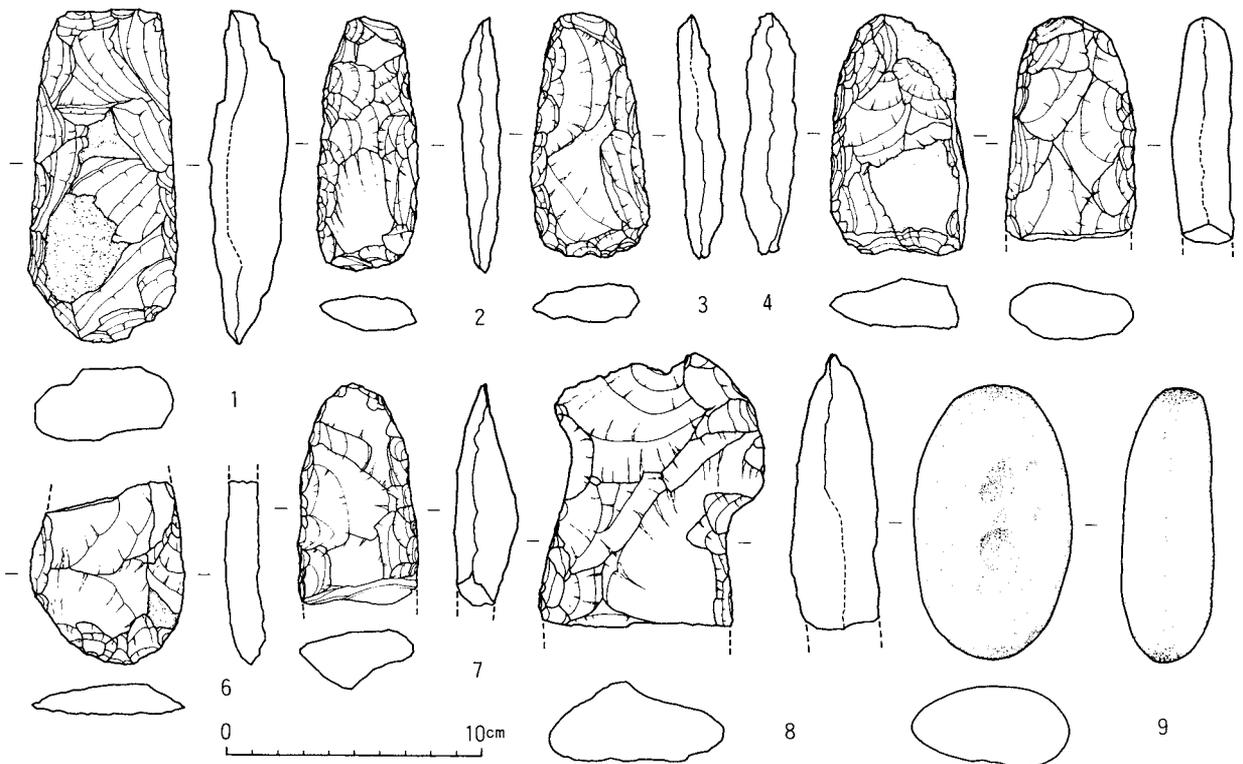
| 遺物番号 | 出土層位 | 分類 | 遺存状態 | 石質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 挿図番号 |
|------------|-------|----|------|------------|--------|-------|-------|---------|-------|
| BC6・7-C1 | 第4層 | Bb | 完形 | 変朽凝灰岩(濃飛系) | 10.1 | 3.9 | 1.5 | 72.5 | 第36図2 |
| D13-C1 | 第4層 | - | 刃部欠 | 石英安山岩 | (8.9) | (5.0) | (2.2) | (143.5) | 第36図5 |
| D13-C2 | 第4層 | Ab | 完形 | 変朽凝灰岩(濃飛系) | 9.7 | 4.6 | 1.7 | 77.0 | 第36図3 |
| E14・15-C1 | 第4層 | Ba | 刃部片 | 変朽凝灰岩(濃飛系) | (7.3) | (6.0) | (1.3) | (71.0) | 第36図6 |
| HI24・25-C1 | 第4層 | - | 刃部欠 | 変朽凝灰岩(濃飛系) | (9.5) | (5.3) | (2.0) | (137.0) | 第36図4 |
| HI26-C1 | 第4層 | - | 刃部欠 | 細粒砂岩(中生代) | (8.8) | (4.7) | (2.5) | (100.0) | 第36図7 |
| P40-C1 | 第4層 | - | 刃部欠 | 変朽凝灰岩(濃飛系) | (10.9) | (8.9) | (3.2) | (328.5) | 第36図8 |
| Q42・43-C1 | 第61号溝 | Aa | 完形 | 変朽凝灰岩(濃飛系) | 13.1 | 5.8 | 3.1 | 250.0 | 第36図1 |

2. 石器

本地区からは、打製土掘具と敲石の2種類の石器が出土している。

打製土掘具 8点出土している(第2表, 第36図1~8)。このうち同図1を除いた7点が第4層から検出されており、時期的には中期中葉~後葉・後期中葉に属するものである。この「打製土掘具」はいわゆる「打製石斧」のことであり、佐原真氏の提唱した名称をここでは用いた(佐原1977)。これらを刃部の形態により分類すると、Aa・Ab・Ba・Bbの各々がそれぞれ1点づつである。次に、打製土掘具に利用されている素材についてみると、手取川流域および手取川扇状地の縄文遺跡ではそのほとんどが河原石を素材として製作されているのに対し、本地区のものでは河原石を素材とするものはわずか2点だけであり(第36図5・8)、一般的傾向から大きくかけ離れて特異な存在となっている(山本1985)。こほ点がテラダ地区の打製土掘具の特色である。

敲石 BC5区から1点のみ出土である(第36図9)。両面ともに敲打によるくぼみ穴がみられ、側縁部にも敲打痕が認められる。石質は角閃石安山岩であり、重さは292.0gを測る。



第36図 石器実測図(縮尺 1/3)

第2節 平安時代～中世の遺物（第3表、第37・38図、図版17・18下）

個々の出土遺物の説明は観察表に譲ることとし、ここではその編年的位置付けについて考えてみたい。遺構単位でまとまった資料がないため、包含層出土品も含めて全体を対象としていく。

平安時代 須恵器食膳具の組成は杯A、杯B、皿A、(小杯)と単純で椀皿類は含まない。杯Aは口径11.5～13.2cm。やや肉厚で器高の高いもの(第37図20・21)と器肉が薄く杯部が開いて扁平な形態のものがあるが主体は後者である。体部は成形時のロクロひだが目立つ。外傾度は前者が54°前後、後者は44°～50°である。杯BはI(大型品)とII(小型品)がある。杯B IIは蓋1点(第37図14)があるのみで少ない。杯蓋で無鈕のものは確認できない。皿Aは口径15.0～16.2cm。器肉はやや肉厚。体部の長さが短いもの(第38図6)は少ないが、二段に屈曲するロクロひだが明瞭となりつつある。貯蔵具の組成は不明確である。大甕(第37図6)の口縁端部はさほど発達しない。

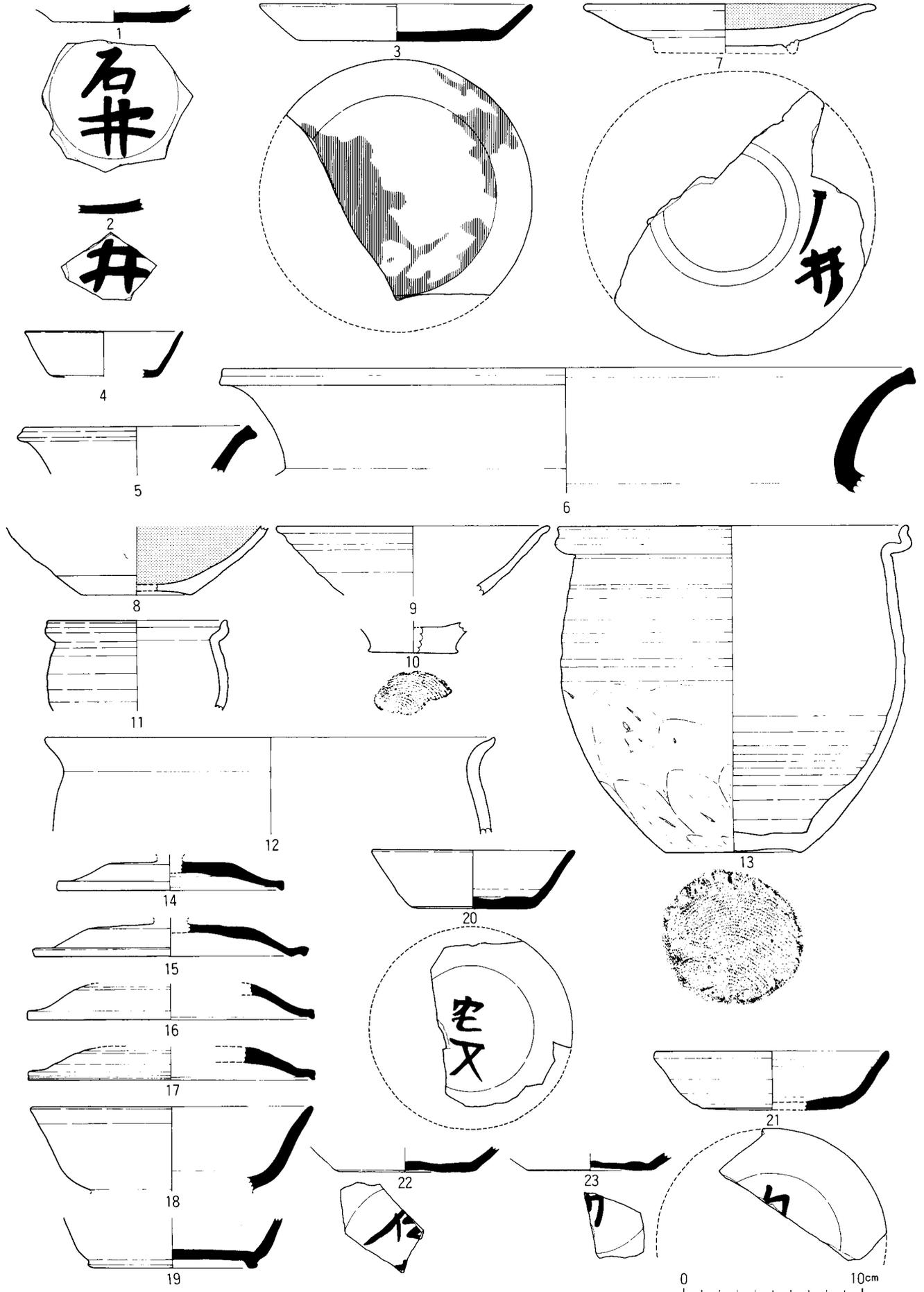
土師器食膳具は椀・有台椀・有台皿がある。有台椀は少量である。食膳具はほとんどが黒色土器で外面を赤く発色させたものである。糸切り後の底部調整は顕著で、全般的に成形の丁寧なものが多い。皿の口縁部は端部近くで外に折れ、受け口状の内傾する凹面ないしは平面を持つのが特徴である。煮炊具は長甕と平底の小甕(法量差あり)、鍋がある。長甕は胴部にカキ目調整を伴うものはほとんどなくロクロひだの顕著なものである。口縁端部は先端が先細りで上外方へのびるもの(第38図20)と一担内側へ折れさらに上方にのびてその内側にロクロナデを施し直立ぎみの面をなすもの(第38図19・21)があるが、主体は後者である。後者の口縁端部の形態でS字状にまで発達したものはない。小甕の口縁部は長甕ほど屈曲せず上方にのび、端部に丸いが内傾ぎみの面をなすようなロクロナデを加える。小甕は例外なく口縁部にススが附着し、長甕にはそれがない。使用状況の⁽¹⁾を窺わしている。鍋は体部内面に細幅のカキ目調整を伴う。口縁部は内側に折り込んで面をつくるもの(第38図23)と先端を上外方へ引き出すもの(第38図24)があるが、これは時期差を反映したものとみられる。

以上の組成、形態の特徴を持つ土器は吉岡編年Ⅳ期(吉岡1983)、田嶋編年古代4様式Ⅱ期(田嶋1987)に位置付けられ、ほぼ9世紀後半の年代観が与えられる。最後に本遺跡出土土器の供給圏についてふれておきたい。Ⅳ期(吉岡1983)以降、南加賀地域で主体的な生産地となる小松市戸津町周辺の窯とⅡ期～Ⅲ期を主体に生産する辰口町南部地域の窯の製品の胎土を射程において観察表の分類を行った結果、大半が前者というデータが得られた。土師器煮炊具においても同様の結果であった。この事実は、8世紀～10世紀までほぼ連綿と続く辰口西部遺跡群で、Ⅲ₂期までは能美窯跡群の製品がほとんどでありながら、Ⅳ期に至って小松南部産へと急転換するという土器の動態とも一致している。おそらくはⅣ期以降生産が途絶える能美窯跡群と逆に隆盛を向えていく小松南部地域の窯跡群の動向を如実に反映したものであろう。Ⅳ期に「中核的な窯跡群を除いて稼働を停止し、一方では窯跡群の拡散・分散化が進行する」(田嶋1987)という広域での社会的事象と一体の動きである。

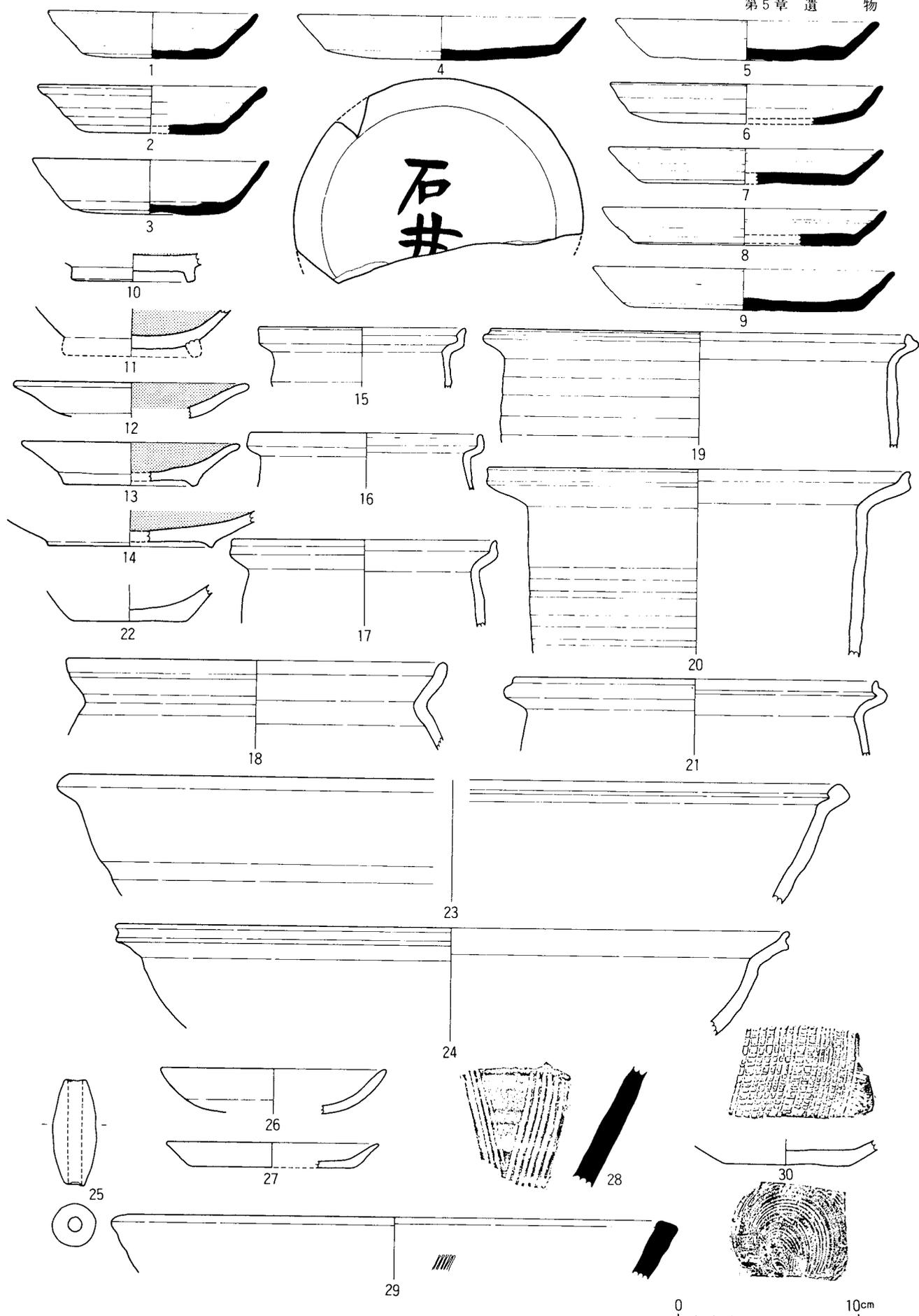
中世 1号溝からは底部に厚みのある台部を持つ椀(第37図10)が数点のほか、内面に櫛描きの文様をもつ白磁碗の破片が出土している。12世紀前半代とみられる。ほかには13世紀代(土師質土器第38図26・27、青磁碗)、14世紀後半～15世紀前半代のもの(珠洲鉢第38図28・29、瀬戸おろし皿第38図30、青磁鉢)が少量みられる。

注 (1)坂井秀弥氏の教示による。

第2節 平安時代~中世の遺物



第37図 遺構(1~13)・包含層(14~23)出土遺物



第38図 包含層出土遺物

第2節 平安時代～中世の遺物

第3表 遺構・包含層出土遺物観察表

遺構出土遺物

| 図番号 | 出土地点 | 器種 | 法量 (cm) | 胎土 色調 | 備考 |
|------|-----------------|-----------|----------------|----------|-------------------------------|
| 37-1 | F-16区 P166 | 須恵器 杯A | 底 7.2 | B? C | 「石井」 |
| 2 | A・B-4区 土坑1 | 皿A | | A B | 「井」 |
| 3 | P-40区 P482 | 皿A | 口15.4 高 2.1 | A B | 転用硯 |
| 4 | C-9区 P148 | 小杯 | 口 8.8 高 2.6 | A | |
| 5 | Q-42・43区 溝61 | 横瓶? | 口12.5 | ? A | |
| 6 | 〃 〃 | 〃 甕 | 口38.8 | ? A | |
| 7 | D-14区 P164 | 土師器 皿B | 口16.2 | | 「石井」, 体部下半～外底ロ クロケズリ, 外面赤色 |
| 8 | D-13区 P253 | 腕A | 底 6.0 | | 体部下位～外底ロクロケズ リ, 外面赤色 |
| 9 | B-4区 溝1 | 腕 | 口15.4 | | |
| 10 | 〃 〃 | 〃 腕 | 底 5.0 | | 外底回転糸切り |
| 11 | I-25区 P347 | 小甕 | 口10.0 | | 口縁内面スス |
| 12 | C-11区 溝9 | 甕 | 口25.3 | | |
| 13 | I-25区 P354 | 小甕 | 口19.4 高18.6 | | 体部下半ケズリ, 外底回転 糸切り, 口縁内面スス |

包含層出土遺物

| | | | | | |
|-------|---------|-------------|----------------|------------|------|
| 37-14 | B-5区 | 須恵器 杯蓋II | 口12.6 | B C | |
| 15 | D-12区 | 杯蓋I | 口15.2 | A B | |
| 16 | D・E-13区 | 〃 | 口16.0 | A B | |
| 17 | あ区 | 〃 | 口16.0 | ? A | |
| 18 | D-14区 | 杯B I | 口15.7 | B? A, C | |
| 19 | H・I-25区 | 〃 | 台 9.5 | B A, C | |
| 20 | う区 | 杯A | 口11.5 高 3.3 | A B | 「宅口」 |
| 21 | D-14区 | 杯A | 口12.9 高 3.4 | B? C | 墨書 |
| 22 | C・D-10区 | 杯A | 底 8.0 | A B | 「石井」 |
| 23 | D-12区 | 杯A | 底 7.2 | A C | 「困カ」 |
| 38-1 | う区 | 杯A | 口11.7 高 2.6 | A B | |
| 2 | O-38区 | 杯A | 口12.7 高 2.7 | A B | |
| 3 | D-14区 | 杯A | 口13.2 高 3.0 | A B | |
| 4 | D-13区 | 皿A | 口16.1 高 2.5 | A B | 「石井」 |

| 図番号 | 出土地点 | 器種 | 法量 | 胎土 色調 | 備考 |
|------|----------|-----------|----------------|----------|-----------------------|
| 38-5 | D-14区 | 須恵器 皿A | 口15.4 高 2.3 | A D | |
| 6 | D-13区 | 皿A | 口15.0 高 2.2 | A B | |
| 7 | う区 | 皿A | 口15.1 高 2.0 | A B | |
| 8 | F-17区 | 皿A | 口15.6 高 2.1 | A B | |
| 9 | D-14区 | 皿A | 口16.2 高 2.4 | B? C | 内底滑 |
| 10 | C-8区 | 土師器 椀 | 台 6.9 | | 外面赤色 |
| 11 | H-23区 | 椀 | | | 〃 外底ロクロケズリ |
| 12 | G・H-22区 | 皿 | 口12.8 | | 〃 体部下位ロクロケズリ |
| 13 | D-13区 | 皿 | 口12.0 高 2.4 | | 外面全体・高台端部磨耗 |
| 14 | う区 | 皿 | 台 9.3 | | 〃 外底ロクロケズリ |
| 15 | H・I-26区 | 小甕 | 口11.5 | A | 口縁内面スス |
| 16 | D・E-13区 | 小甕 | 口12.8 | A | 〃 |
| 17 | D-14区 | 小甕 | 口14.7 | A | 〃 |
| 18 | D-12区 | 甕 | 口21.0 | C | 体部外面・口縁～体部内面 カキメ |
| 19 | お区 | 甕 | 口23.2 | A | |
| 20 | お区 | 甕 | 口23.4 | B | 円～垂円の風化したM砂粒 を多量含む |
| 21 | E-12・13区 | 甕 | 口20.0 | A | |
| 22 | D-12区 | 甕 | 底 6.4 | A | 赤化, 磨耗 |
| 23 | D-12・13区 | 鍋 | 口(43) | A | 体部内面カキメ |
| 24 | H・I-26区 | 鍋 | 口37.5 | A | 口部～体部内面カキメ |
| 25 | H・I-25区 | 土錘 | 長 6.0 径 2.4 | A? | 重量33.0g 孔径0.8 |
| 26 | E-17区 | 土師器 皿 | 口12.6 | | 褐 内面油煙付着 |
| 27 | A・B-3区 | 皿 | 口11.7 | | 橙 |
| 28 | B-4区 | 中世陶 鉢 | | | 珠洲 |
| 29 | お区 | 鉢 | 口30.0 | | 〃 |
| 30 | う区 | おろし皿 | 底 6.9 | | 瀬戸 |

胎土 須恵器 A: 小松南部 B: 能美(南群)
土師器 A: 小松南部 B: 能美? C: ?

色調 須恵器 A: 黒色～灰黒色 B: 暗灰～帯緑灰色 C: 淡灰色

第6章 岩内遺跡テラダ地区をめぐる諸問題

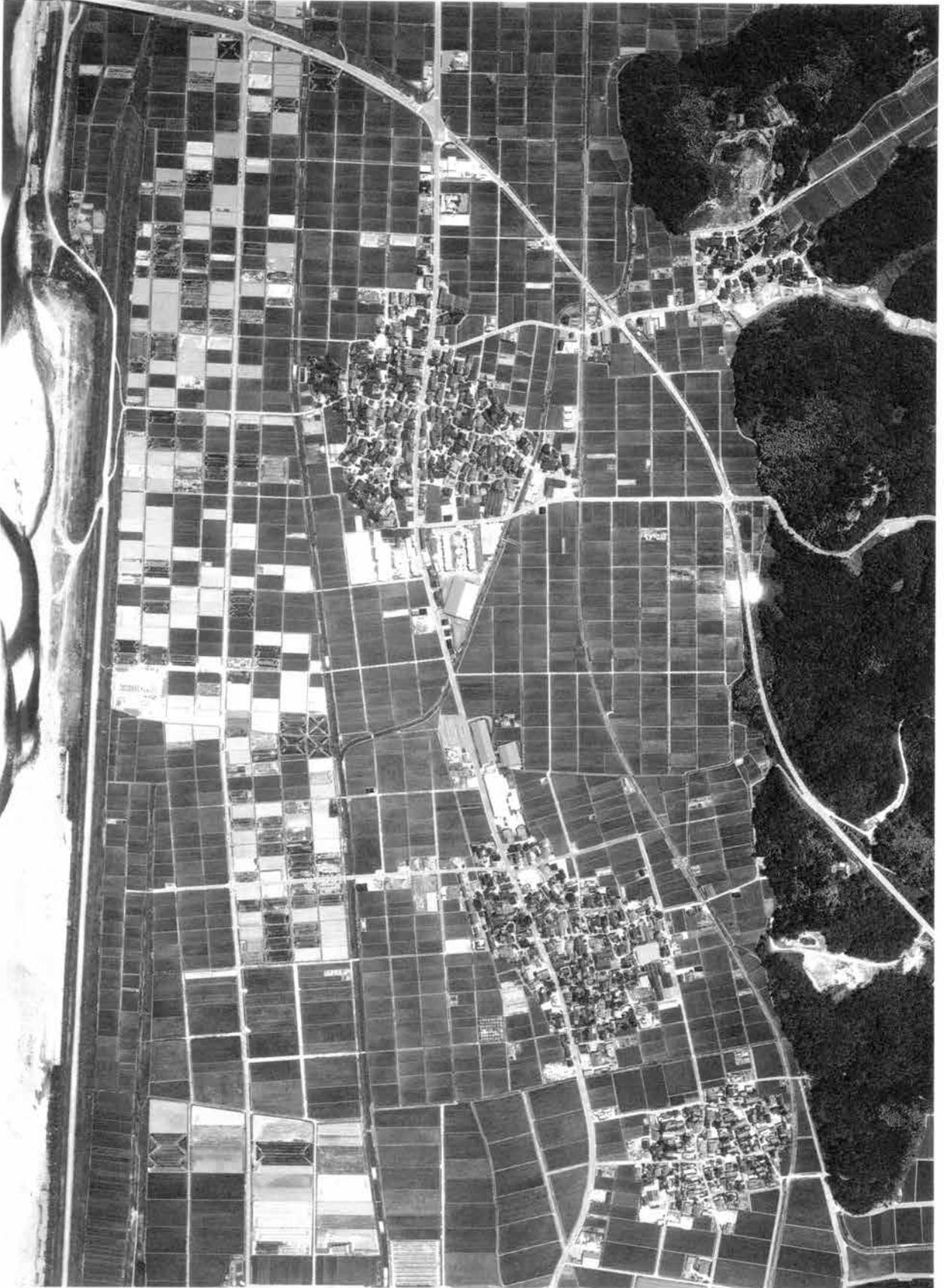
第1節 岩内遺跡テラダ地区をめぐる

岩内遺跡は、手取川扇状地扇側部の島状地帯に立地し、縄文時代中～晩期から古墳時代～中世にかけての複合集落遺跡である。ハチマンガ地区は縄文時代晩期の比較的単純な遺跡である（山本1986a）のに対し、このテラダ地区は9世紀後半の平安時代を主体とする遺跡である。

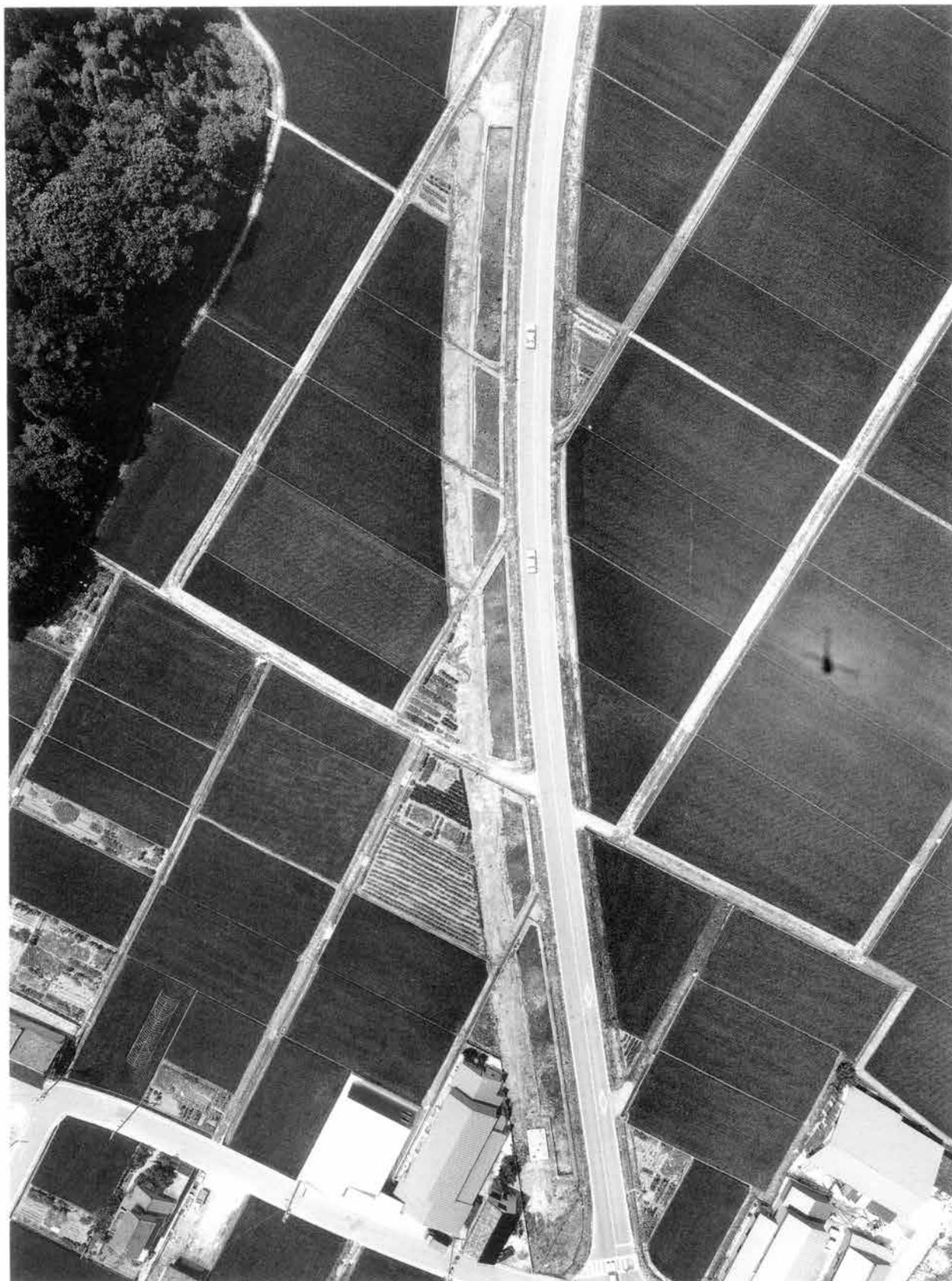
このテラダ地区からは墨書土器が8点出土しており、このうち「石井」・「井」と確実に読める墨書土器がそれぞれ2点ずつ出土している。これらはいずれも9世紀後半頃の所産であり、狭い時間幅の中でおさえられる資料である。また一方では、本遺跡付近が平安時代末期の石内保の保域として推定されており（浅香1978）、これらことから「石井」の墨書土器と「石内」との密接な関係も推測できよう（山本1986b）。

引用文献

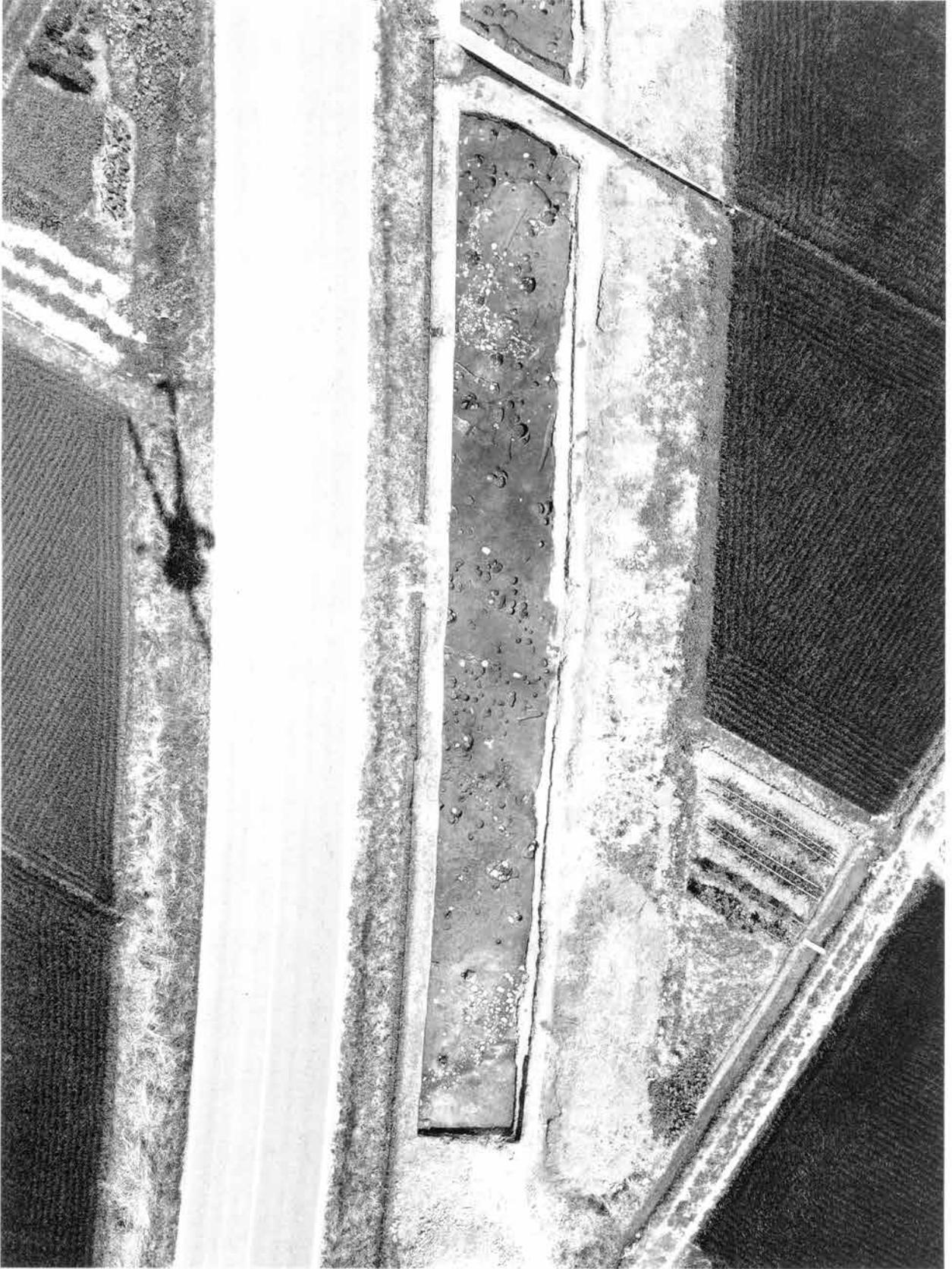
- 浅香年木（1978）『古代地域史の研究』 法政大学出版局
- 石川県立埋蔵文化財センター（1986）『石川県遺跡地図』
- 河村好光（1984）『羽咋市柳田シャコデ遺跡 能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司（1985）「徳久・荒屋遺跡」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 12～23頁 石川県立埋蔵文化財センター
- 越坂一也・他（1987）『永町ガマノマカリ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 駒見和夫（1986）「富山県における竪穴住居と掘立柱建物住居 一奈良・平安時代集落研究の一視点一」『大境』 第10号 富山考古学会
- 里見信生（1983）「植生」『辰口町史』 第1巻 169～186頁 石川県能美郡辰口町役場
- 佐原 真（1977）「石斧論」『考古論集』 45～86頁 松崎寿和先生退官記念事業会
- 田嶋明人・他（1971）『法皇山横穴古墳群』 加賀市教育委員会
- （1987）「古代土器の編年軸設定」『篠原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋正和・他（1981）『勅使館跡発掘調査報告』 加賀市教育委員会
- 土肥富士夫・他（1983）『万行赤岩山遺跡 一宅地開発に係る緊急発掘調査報告書』 七尾市教育委員会
- 福島正実・他（1983）『柳田タンワリ古窯跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 藤 則雄・編（1980）『石川の地形・地質案内』 東京法令出版
- 山本直人（1985）「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』 第28号 35～56頁 石川考古学研究会
- ・本田秀生・他（1986 a）『石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター
- （1986 b）「辰口町岩内遺跡テラグ地区出土の墨書土器」『拓影』 第20号 石川県立埋蔵文化センター
- 吉岡康暢（1983）「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 米沢義光（1986）「第15群土器 気屋Ⅱ式期」『石川県能都町真脇遺跡』 165～169頁 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団



岩内遺跡付近航空写真1（左側が北）



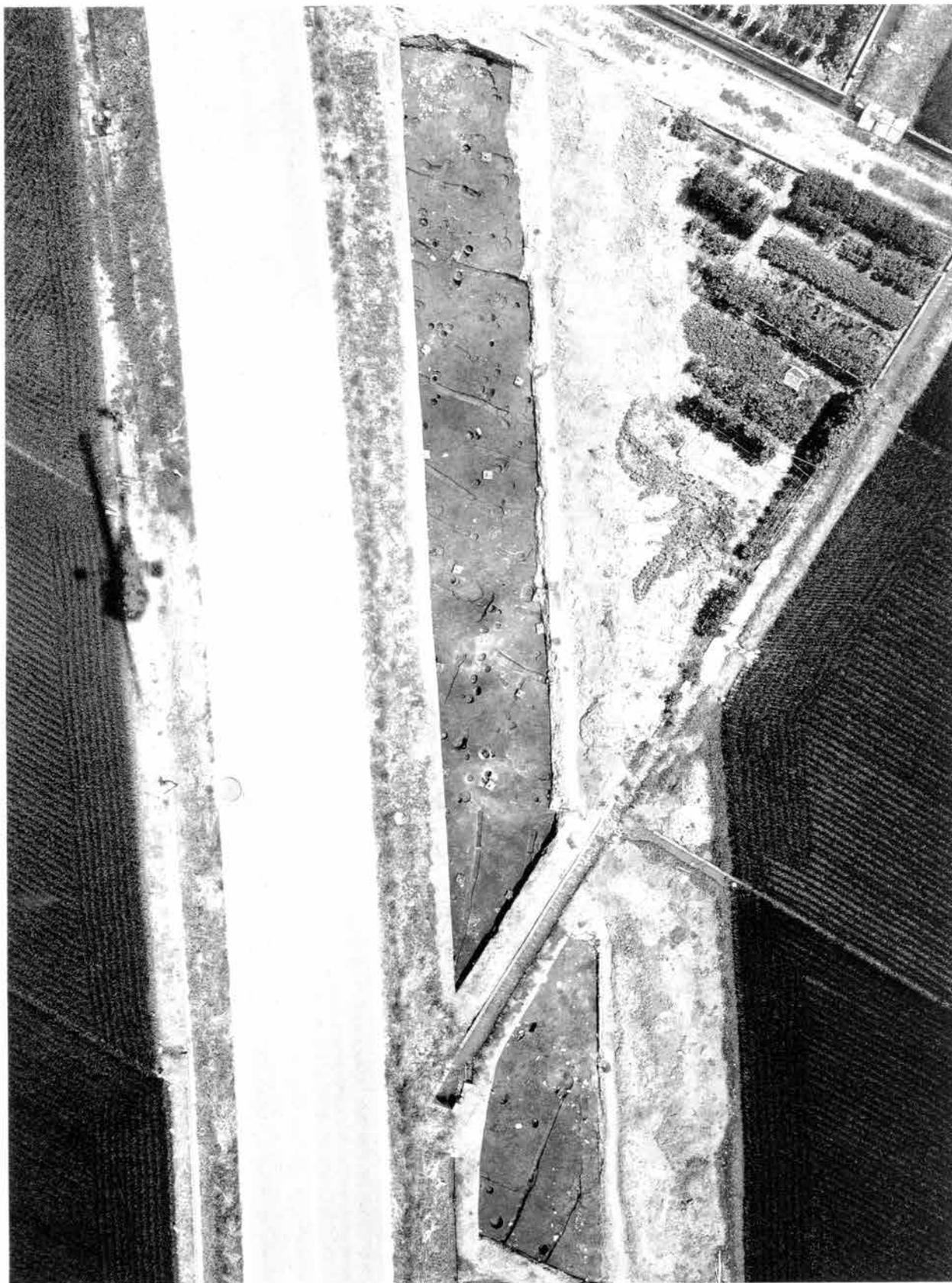
岩内遺跡テラダ地区航空写真1



岩内遺跡テラダ地区航空写真2



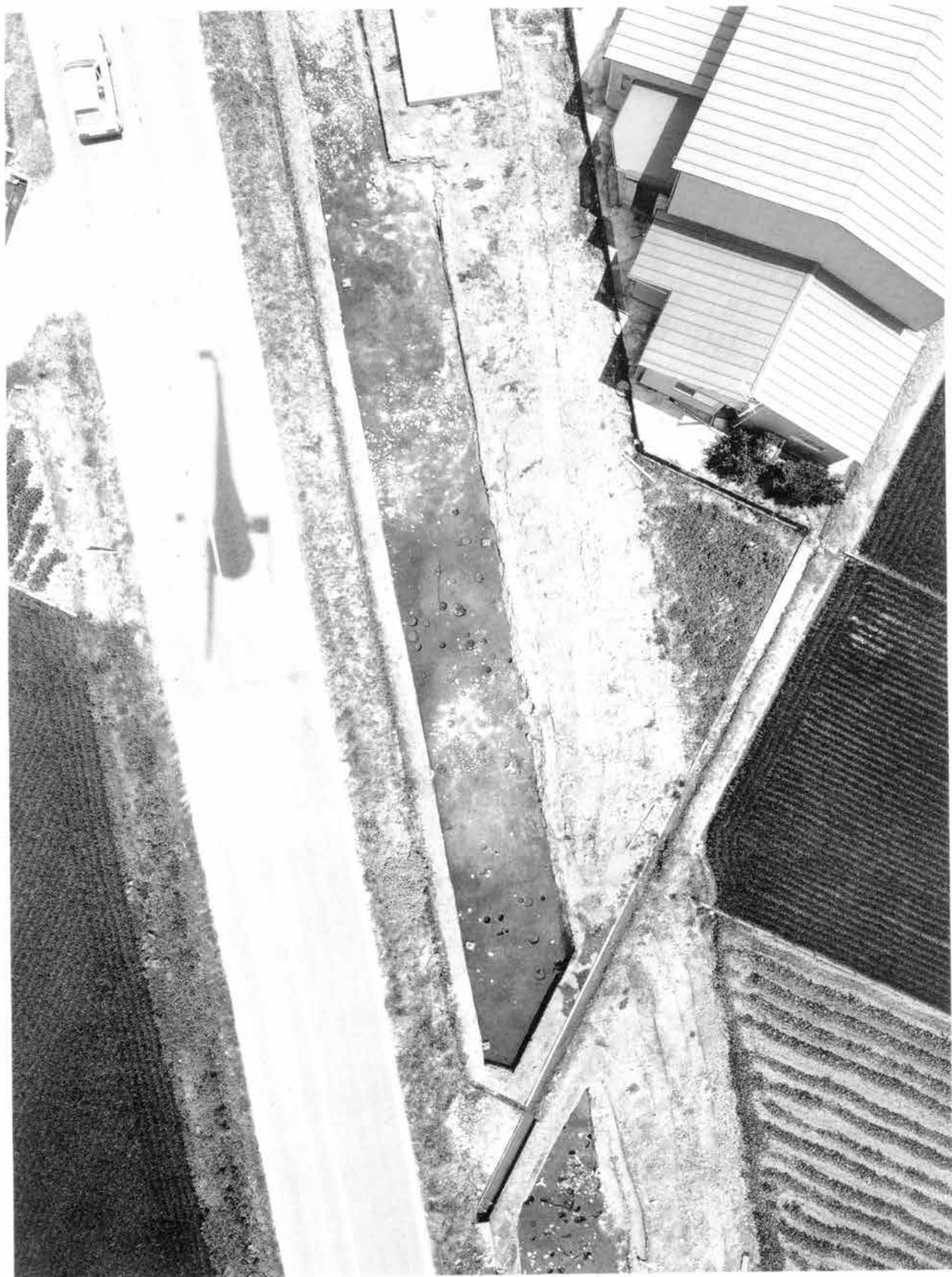
岩内遺跡テラダ地区航空写真3



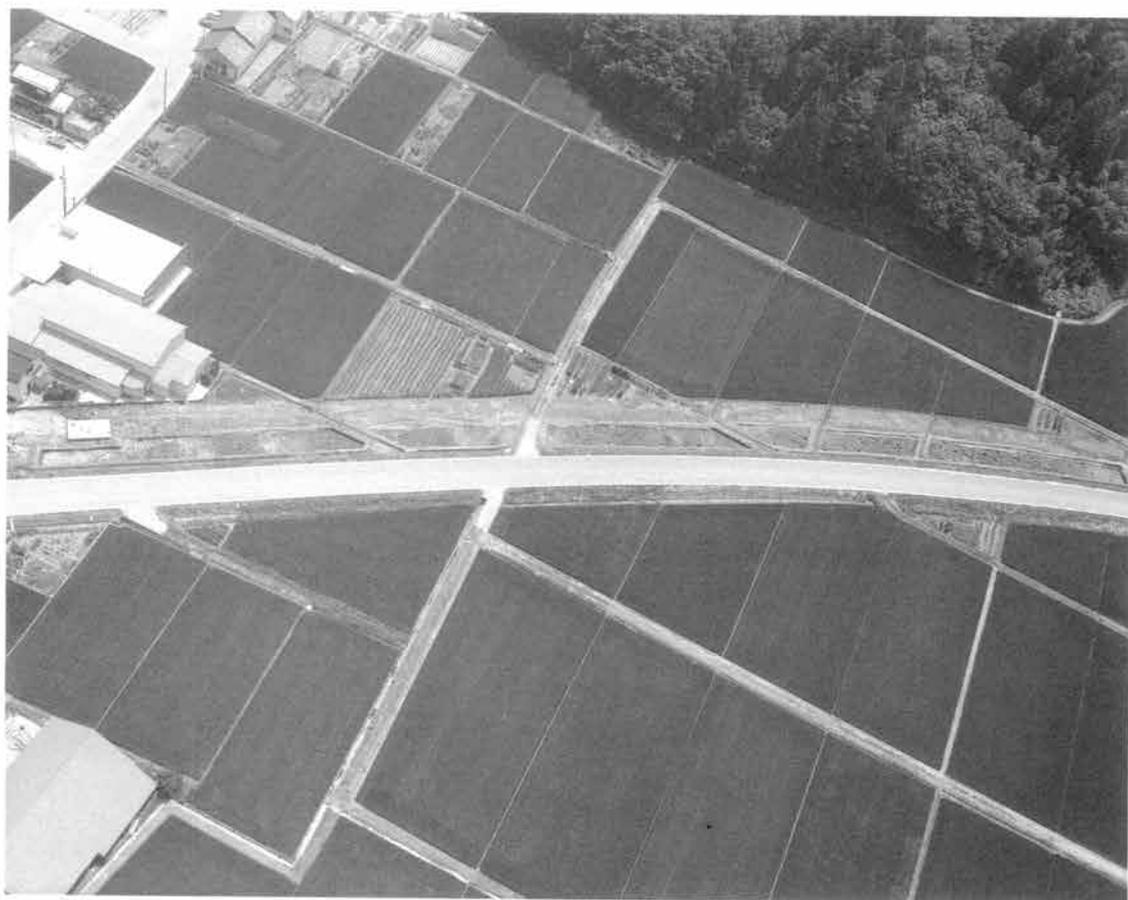
岩内遺跡テラダ地区航空写真4



岩内遺跡テラダ地区航空写真5



岩内遺跡テラダ地区航空写真6



上 岩内遺跡付近航空写真2（東より）

下 岩内遺跡テラダ地区航空写真7（北より）



上 岩内遺跡テラダ地区航空写真8 (西より)
下 岩内遺跡テラダ地区航空写真9 (南西より)



岩内遺跡テラダ地区遠景 上（筋生遺跡より）
下（北より）



上 発掘調査作業風景

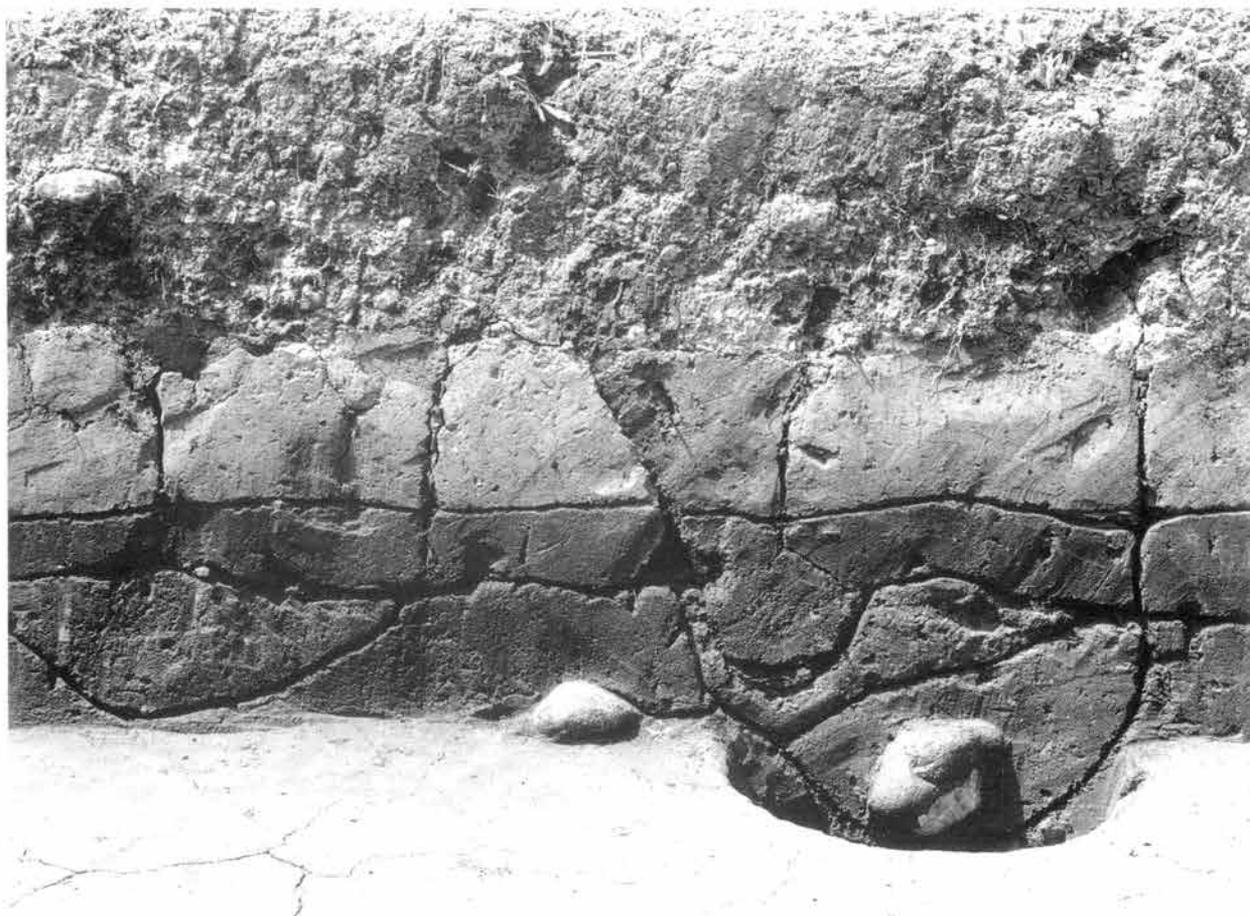
下 12~20区(西より)



竪穴状遺構 上(南より)
下(東より)



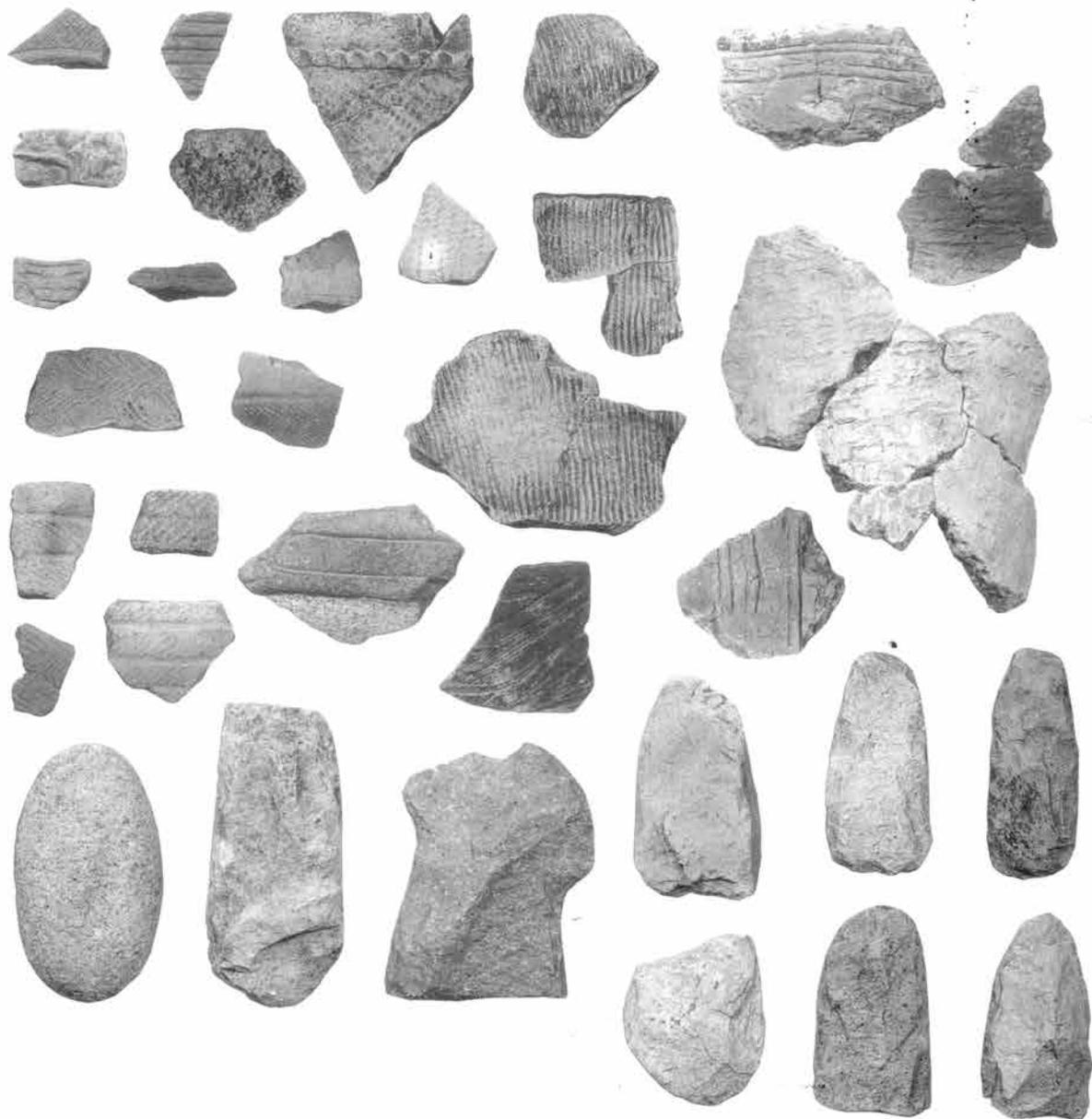
ピット482内須恵器出土状態



上 13区北壁
下 39区北壁



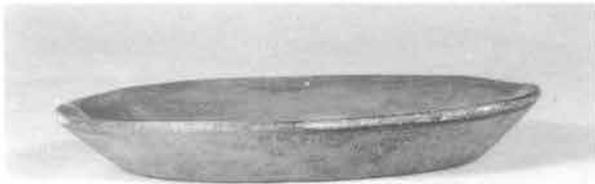
上 36区北壁
下 44区北壁



縄文時代の遺物（縮尺1/3）



墨書土器等 (縮尺1/2)



上 縦穴状遺構出土遺物（縮尺1/3）

下 平安時代の遺物（縮尺不同）

石川県能美郡辰口町

岩 内 遺 跡

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話(0762)43-7692番(代)

印 刷 北 国 書 籍 印 刷 株 式 会 社